
声美少女伝説

yuzuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声美少女伝説

【Nコード】

N6125T

【作者名】

yuzuki

【あらすじ】

突然女になつてしまうという不遇の体質を得たボクは、その無駄な能力と才能を遺憾なく発揮して、日常生活を誤魔化しつつ校内放送番組を盛り上げていこうというお話。日常パートと放送パートに分かれています。年齢制限……？なにそれ、おいしいの？

第一話 - ボクの日常 -

それを最初に感じたのは、とある日の午後の授業中のことだった。五月晴れのうららかな日差しの中、先生の宇宙語を子守唄に誰もが眠気に誘われる、そんないつもの風景の中。当然、ボクのノートへと写される文字は宇宙語からミミズ語へと変換され、その不可思議な魔方陣からはスイマという名の悪魔が召喚され続けていた。

その悪魔の名が、スイマからメマイへと変わっていたのはいつからだったのだろうか。

……あれ？

先生の有難い説法が日本語に聞こえないのは元からだったが、前の席の女の子のポニーテールが揺れているのは、眠気のせいでも風のせいでもなかった。

昼に、なんか変なモン、食ったっけ……？

校門前の定食屋で一杯五十円というどこぞのインスタントラーメンも吃驚の激安ラーメンに甘い練乳抹茶ミルクと、思い出しただけで胸焼けがしてくるランチセットを食べたということ以外は、至っていつも通りの昼食だった。その甘い甘い練乳抹茶ミルクを買ってきやがった友人ミッチィに誘われるがままに参加した食後の三十分間耐久リアル鬼ごっこは、軽い吐き気とともに、無断で学外へ出たことによる反省文というオマケがついたこと以外は、至っていつも通りの平和なお昼休みだった。もちろん、鬼は生徒指導の非常にリアルな鬼。

軽い運動をこなした後だったので、午後一番の授業はぐっすりと睡魔と戯れるはずだった。

吐き気ではなく、腹痛でもなく、何故だか脂汗のようなものが背筋を流れる。

突然、外からの衝撃によって、身体がビクリと揺れた。後席のミッチィに椅子の足を蹴られるとともに、「テメー、何フラフラ揺れ

てんだ、集中（睡眠に）できねーじゃねえか、テメーはコケシ（電動）かごらあ」という脳内メッセージが届けられたが、それはもちろんスルー。ボクの身体と視界は、風に揺れるポニーテールのごとくユラユラと揺れ続けた。

日差しはそれほど強くないのに、春のそよ風は心地よいのに、身体が芯から熱くなっていった。

まるで、身が内から作り変えられていくように。

気がつくと、ボクは両肘を机について、黒板ではなくノートの一点を定まらない視線で呆然と眺めていた。

机の上には、横からペンが転がってきた。隣の席の友人チルが投げってくれたらしい。先ほどまでボクの右手に収まっていたペンだった。視線を隣へ投げかけると、チルが心配そうな顔でこちらの様子を伺っていた。

「……大丈夫？」

普段はリアル鬼とタメを張れるほどのリアルナマハゲのチルが、人並みに心配している。むしろチルの方が心配です。何か変なものでも食べたんですか。

「バカ言ってんじゃない！」

消しゴムを投げられました。

確かに変なものを食べたのは自分の方だろう。賞味期限は大丈夫かと疑うような激マズラーメンだけでなく、その品質保証と舌を疑うようなチルの手作りお菓子を休み時間につまみ食いたがために、激甘練乳抹茶ミルクを触媒にして、ボクの胃という試験管の中で化学反応を加速させ、出来上がった劇薬がこのような体調不良をもたらしたのだろう。

「勝手に食べたのはアンタでしょ！」

いやいや、お菓子から漂う、まるで食虫植物の甘い香りを思わせる誘うような危険な薫りがミツバチのようなボクの鼻を刺激し、まるでアリ地獄に引き込まれるがごとく

「な、なあ」

チルの殺気と、先生からのキミ達もう少しだけ授業に集中してくれないかなあという控えめな視線を無視して、後ろからミッチィが割り込んできた。

「オマエ、なんか、変じゃないか？」

何を言う。この気品溢れる姿と凜々しい顔つき、仏を思わせる慈愛に満ちたこの

「いや、オマエの頭がおかしいのは元からなんだが。そうじゃなくて、声とかが……」

言われてから気がついた。ボクの声は、まるでテンパった時のように裏返っている。心は非常に落ち着いているのだけど。

いつの間にか、眩暈も汗も引いていた。

しかし、どこか違和感がある。

「そういえば、顔もなんかいつもと違うような……」

ミッチィだけでなく、チルまでがそんなことを言う。

顔が違う。いや、ボクの違和感はそのような生易しいものではなかった。

芯から来るような熱が引いて、全身の指先の皮膚の感覚までを敏感に感じ取って、ボクの身体に起こった異常はそんな生易しい症状だけではないことを体感していた。

まず第一に、ボクの着ている制服がおかしい。いや、服がおかしいのではなく、どこも変わりないいつもの地味な学校指定の学ランなのだが、サイズがおかしい気がする。ボクの制服ってこんなにブカブカだっただろうか。

そして、次に股間がおかしい。妙に涼しい。いや、ボクの股間のブツが寂しいほど小……なのではなくて、サラリーマンにもおススメ蒸れないスツキリパンツを穿いているのでもなくて、何かが足りない気がする。

最後に、どことなく胸を圧迫する何かを感じていた。胸の奥からジンジンするような、意識するとまるで恥らう乙女のようにトクトクと鼓動を奏でる心臓へと繋がる何かを感じる。

学ランの上から、見た目は違いのない黒い服の上から控えめに膨らんだそれへと右手を伸ばす。

……はふうん！

自分の思わずもれた声に驚きましたよ。

慌てて、もらった声を誤魔化すように、手を挙げて先生に自己申告する。

「な、何ですか……」

先生、気分が悪いので、保健室へ行つてきます。

友人達が啞然とする中、ボクは教室を飛び出した。

保健室に行くと言って素直に行くバカがいたいどこにいるのだろっ。

サボりのお約束である屋上へは向かわずに、とりあえずトイレに駆け込んだ。

いや、待て。マジで待て。

これはいつたいなんだ、ワケが分からない。

脳内変換された宇宙語の魔方陣によって召喚されたものは、本物の悪魔だったのだろうか。

駆け込んだ薄汚い男子トイレの鏡の前、映る自分の姿は女の子に見えた。

冗談でもなく嘘でもなく、夢でもなく、本当に女の姿だった。

遠目に見れば気づかないかもしれない。仲の良い友人ではなくて、たまに話す程度のクラスメイトくらいなら誤魔化せるかもしれない。毎日見ている自分の目は誤魔化せない。夢とも思えない、悲しいけどこれ現実なのよなんて感じにもうマジで笑えない。

ボクは女の子だった。

チビなところも、小生意気な目つきも変わらない。なのに、ボクは女になっていた。どこがどう変わったとは見えないが、口元が、頬が、パッチリとした瞳が、女の子していた。小汚い男子便所には似合わない、ブカブカの真っ黒な学ランが似つかわしくない女の子がそこにはいた。顔を真っ青にして、この世の終わりにきたような

彼氏にふられてしまってもう生きていけない産まれてきてスミマセンみたいな顔をして、鏡の前のボクを見つめていた。ボクの口とは裏腹に、内心では相当に動揺しているらしい。

鏡の向こうに悪魔でも見えたのなら、何かを納得してしまえばよかった。

何の変哲もない、その静かな鏡面世界が、かえって不気味で身震いしそうだった。

恐る恐る両手を胸に近づけた。妙にリアルな胸を締め付ける圧迫感に、ボクの心の臓はバクバクと早鐘の警告を鳴らす。手には控えめな弾力と、胸には生々しくかつ感じたこともない感覚に気が遠くなりそうだった。

上着を脱ぐことまではできなかった。

学ランまで脱いで調べる、観察する、云々ではなくそこまでの発想を思いつく前に、頭から離れない大きな一つの懸案事項があった。確かめずにはいられない。

固まっていた両手、そこへ伸ばすことは本能が拒絶しているがそんな情けないヘタレなボクの両手に喝を入れ、胸から下へと移動させていく。

ベルトに左手をかけると、右手を一気にズボンの中へと押し込んだ。

……………キヤ〜！！

放心していたのは一瞬だけだったと思う。

目の前が真っ白になった。

ああボクってこんなに高い声が出せたんだ、と人事のように考える第三者的な自分がいた。そして、無意識という名の第四者的な自分はいち早く我へと返り、手でボクの口を慌てて塞いでいた。

少し時間が立って、冷静な自分が警告を発する。

ヤバイ、今の悲鳴はマジでヤバイ。

廊下に聞こえたのだろうか、トイレのドアの向こうからは、ザワザワとした生徒達の声が少しだけ聞こえてくる。

ボクは迷うことなくトイレの端の個室に飛び込み、窓枠に足をかけた。ここが二階だなんて気にしない、うん、三階じゃなくてホントに良かったです。

っていつか、女の子の声ってよく響くんだなあ。

そんなことを考えながら、思考回路はすでに現実逃避を起こしながら、ボクは窓から飛び出した。

本日はこれにて早退させていただきます。

と、こんな感じに体調変化が起こり始めて、はや数日。

人間とは非常に高い順応性を持ってこの地球上の王者になったんだなあと奇跡のような生命の進化に感謝しながら、ボクは何事もなく生活を続けていた。

あの最初の日の女体化は、走って慌てて自宅に駆け込んで、ムラムラとする心と期待を打ち砕くかのように、服を脱ごうと手をかけた時、気づいた時には男の姿に戻っていた。

いったいいつの間に元に戻っていたのか、全力で走っていたために気づきもなかった。このやり場のないモヤモヤ感はいつたいたいどこにぶちまけてやろうか。

それと同時に、ちよっぴり安堵を感じながら。

その日以来、ボクの身体は度々変化を起こしていた。

授業中であろうが、電車の中であろうが。家族で夕食を取っている時に変わった時は本気でどうなることかと思った。

病院へは行けない。行く気がしない。何より、行かなくても誤魔化せているという悲しい現実がある。

変身した身体は、何もしくとも数分で元に戻る。

不規則な変身ルールの中で、これだけが唯一の救いであり、確定

的なただ一つの法則だった。

なんか涙が出てきそう、神様ボク何か悪いことしましたか、悪魔様ゴメンナサイもう寝ぼけて召喚なんかしませんから。

「ついに頭がわいてきたの？」

これはヒドイ。ボクが人生について本気で悩んでいるというのに。ブツブツと呟くボクに、呆れた顔でチルは話す。

「アンタが悪魔を召喚したとか言い出すからでしょ」

おやしまった、いつの間にか思いのタケがのど元過ぎて外にまで飛び出ってしまったようだ。まあ、そんな些細なこと気にするほど器の小さいボクじゃありませんが。

そう、一番困るのがこれ。友人と会話の最中に変身が起こってしまふこと。

授業中なら、黙っていれば誤魔化せるが、遠目に姿は騙せても声までは隠しようがない。そんな時に変身してしまつたら……。

それはもう、もちろん逃げます。全力で逃走します。おかげで、最近、なんか変なキャラが定着しつつあります、涙。

お願いです、ボクはそんな電波な子じゃないですよ。

「何言ってるの、アンタが変なのは元からじゃない」

ヒドイ言われよう。

「まあ、そのキャラのおかげで、この仕事はなりたってるわけだけど」

だから、ボクはそんな子じゃ

「ほれ、さつさと始める！」

あの、今日はひいひいおじいちゃんが危篤なので、もう帰っていますか？

無言で殴られました。

何かいや々なフラグが立ってしまったので本気で逃げたいのですが、そういうわけにもいかないのです、現状を詳しく説明ならば、今ボクとチルがいるのは校内一防音設備の整った密室に二人きりでいるわけです。このままいや〜んでは〜んな展開に進めば万々歳、

チエリーくんさようならようこそ大人世界へな道へ進むわけですが、そんな吐き気のようなフラグは立っていません、冗談です。スイッチ一つでそのいや〜んではくんな会話が校内全体へと流れる部屋に、ボク達はいます。何故いや〜んであ（略）部屋にいるのかというと、ボク達が昼休みの仕事を行うためです。ここは、放送室という名の愛の巣、ごめんなさい自分で言っていて気分が悪くなってきました。

「アンタ、なに独り言で顔色悪くしてるの？」

やめて、そんな汚れた野良犬を見るような目で見ないでください。自己嫌悪中。

つまり我々は週に一度のお昼の放送という名の責務、兼暇つぶしを行うわけで。

「そりゃあ、アンタにとっては暇つぶしだろうけど」

なんかバカにされてる気がします。

ほらほら、なんか嫌なフラグがピンピンに立ってませんか。朝立ちも目じゃないくらい、ギンギンにテント張った昼立ちが

「下品なこと言うな！」

スリッパ投げられました。

このお昼の放送では、当たり障りもなく音楽をかけたたり、リクエストに答えて手紙を紹介したりする番組だったはずなのですが、いつの間にか我々の漫才を楽しむ放送になっていて、意外に人気があったりします。おかしいですね、ボクはいつも通り話しているだけなのに。

「いいから、さっさと放送始めろ！」

はいはい、どうなっても知らないよ。皮肉を込めて言い返すと、ボクは放送のスイッチを入れた。

第二話 - 第1回ぶりんちゃん放送局 -

あー。あー。てす、てすてす……

何、いいから早くやれと。下から蹴り入れられました。

それでは、本日のお昼の放送を始めます。パーソナリテイはもちろん、後ろの席のヤツからはオマエ、隣の席のヤツからはアンタとしか呼ばれず、もう名前なんてどうでもいいんじゃないかね、考えるの面倒だしどっかの小説みたいに人称だけの、どうもボクです。

「そのボクちゃんを、アンタとしか呼ばない隣の席のチルです。というか、自分で言ってる悲しくない？」

いえいえそんなことはないですよ、涙がちよちよぎれそうなくらいで、口は至って冷静です、放送には差し障りない程度には。そんなわけで、これから数分間、暇つぶし程度にご清聴願えれば……

うっ……

……
「な、何よ、いきなり」

うっ……あ、いや……うん……

……

……

というわけで、先ほどの彼は、自己嫌悪が激しくて立ち直れないとのことなので、バトンタッチを致しまして、本日はワタシがパーソナリテイを勤めさせていただきます。

「……ええっ!？」

おや、どうしましたチル、まるで鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして。

「え、ちよ、ちよっと待って!! アンタ、なんで」

何言ってるんですか、チル。ワタシはボクではなくて

「まさか、アンタ女に」

ガッ!!

……
……
ピ。

あー。あー。てす、てすてす。

皆さん、こんにちは。どうやらチルも納得してもらえたようなので。改めまして本日のパーソナリティを勤めさせて頂きます、ワタシは……そうですね、プリン星からやってきたプリンセス、ババロア姫ということに。

「プリンじゃないのかよ。ていうか、アンタ自分で言ってる恥ずかしいくない？」

「ごめんなさい、もう言いません、自分で言っていて恥ずかしくて死にそうです、穴があったら埋めてもらいたいです、ワタシにはもう穴があっても突っ込むナニがないもので。」

「台本投げられました。というか、この放送台本あったんですね、ワタシ初めて見ました。」

「それは、アンタが毎回、台本の内容無視して進めるから」「いや、アンタっていったい誰のことでしょうね。ワタシはスペシャルゲストのプリンちゃんですよ。」

「もういい」

えー、放送に関する質問、リクエストなどはいつものように手紙を届けるか、掲示板への書き込み、もしくはメールなどでも受け付けています。

それから、本日の放送につきましては、放送事故みたいなものですので、事前に録音したものを放送させて頂いております、ご了承ください。

それでは、一曲目、二年A組の匿名希望のミッチイさんからのリクエストです。好きな人に思いが届くように、曲名は

）

さて、何やら曲紹介の間に、この声誰だとか、こんなアニメ声のやつ放送部にいたっけとか、某ミツチイさんからの苦情のメールなども舞い込んできているかと思えますが、この放送はあくまで事前収録なので、皆様の質問全てにお答えすることはできません。

ですが、ワタシのプリンパワーをもって先読みを行い、いくつかの質問メールに答えていきたいと思います。

「マジか……」

いや、何言ってるんですかチル、あたりまえじゃないですか。リスナーの疑問に答えるべく、ワタシが精一杯の予知能力を駆使して。

「はいはい」

まずは、一通目。

というか、質問メールのほとんどがこれ。

『アンタ、だれ?』

こんな疑問メールがたくさん、それはもう山のように届いていきますよ。

それでは答えていただきますよう、チル!

「ふえあ!?!」

こらこら、冷や汗流しながら、なるようになるさ、まあ本人に任せておけみたいな、投げやりな気持ちでお茶すすってる場合じゃないでしょう。リスナーの疑問は山のように届いているわけですから、って、アタシが答えるの!?!」

当然。

では、お答えを。

「……そ、それは、プリン星からやってきた
却ーっ下!」

同じネタを繰り返すなんて芸がないですね、胸もないですね、あるのはお尻と二の腕についた脂肪のカタマリだけで。

「お黙り!」

ともかく、メールには例の自己嫌悪で降板させられた彼が変声機

を使っているんじゃないかとか、ネタに困って新キャラ作ってるとか、しゃべりがまんま一緒だぞとか言われておりますが、決してそんなことはないです。

やだなあ、変声機にこんな可愛らしい声を作れるはずがないじゃないですか。

それに、変声機ごときに、この立派なおっぱいは作れませんよ。

「リスナー、見えてないから。いや、脱がなくていいから……えっ！ あ、ちょ、ちょっと待ってって!？」

そんなに疑うなら、チル、実際に触ってみなさいよ。ていうか、ついでに、確認しとこう。

「だ、だからって、なんでアタシの胸まで……きゃ〜!」

ガッ!

ガタンツ!!

……
ピ

……

あー。あー。

失礼しました。

実はワタシの方が胸があったという衝撃の事実はさておき、チルチル本気で蹴らないでください、メール紹介の続きへいきたいと思います。

それでは、お次のメールです。

『もうあなたの正体なんてどうでもいいです。声に惚れました。付き合ってください』

という、これまた匿名希望の二年B組のタナカくんから頂きました。いや〜嬉しいですね。でも、匿名希望を名乗るタナカくんと付き合うことはできません。

ごめんなさい。罪なワタシを許してね。

なお、何故匿名希望の正体が判明しているのかという質問につい

ては、PC部の部長さんと、学内ネット管理担当の情報の先生で、二人でよく話し合ってもらつたということだ。

すみません、悪ふざけがすぎました、この放送を本気で見捨てないでください。

ちなみに、なぜタナカくんとお付き合いできないのかというと、ワタシは身も心も全てをこの隣にいるチルチルに捧げていますので。「ぶお！……ごほっ、ごほっ！」

そんなわけで、ワタシ達の愛の巢には決して近づかないでくださいな。なお、廊下で出待ちを期待している皆さん、何度も言うようですが、本日の放送は事前収録なのであしからず。

それでは、続いてのメールにいきましょう。

ほらほら、何固まつてんの、次の紹介メールを見せて。それともそんなメールじゃなくて、アナタのカチンコチンに固まったそれを、ワタシが舌で優しくときほぐしてあげるから、早く見せてってばダリン。

「一回死んでこい」

なんてヒドイ言われよう。ツンデレとして受け取っておきます。

……すみません、これ以上やると健全な青少年にはお聞かせできないどころか、先生方からストツプがかかりそうなので自重します。

次のメールは、

えっ、メールじゃなくて、先生の呼び出し？

だから、これは事前収録だって何度も言ってる……

ホントにコレ読むんですか？

ピンポンパンポン

放送部顧問の先生、PC部顧問の先生、至急校長室までお越しください。繰り返し、放送部顧問の……

ピンポンパンポン

何があってもこの放送は止まりません、誰にも止められません！

さあ、続いているメールです。

なに、これが最後？！

いつの間にか時間と容量がおしてきていますので、残念ながらこれを最後のメールとしたいと思います。

『姫、最後に優しく好きですって言うてください。それだけでも満足です。ごはん十杯いけます』

という、匿名希望の三年D組の……って、皆さんもう分かって匿名で送ってきてますね。

それでは、チルがエコーまでかけてくれると思いますので、皆さんこれを録音して目覚ましにするなりおかずにするなり好きなようにしてください。

大好きだよ、ミツチィ！

……え、何やら身に覚えがないぞという悲鳴が聞こえてくるようです。いや、何のことかな、思わず言っちゃったけど。

そんなわけで、本日は臨時でパーソナリティを勤めさせて頂きました、プリン星からやってきたプリンセスと、

「……どこからどう突っ込んでいいのか分からない、チルでした」
やだなあ、今なら前と後ると、あと上の口からも

ピ　ブチン！

「アンタねえ、いつたいその身体、どうなってるの？」

そんなのボクが知りたいです。ちなみに、今日はまだ女の子のまま、まだしばらく戻る気配なし。放送中に戻らなくてよかった、またなんか変な設定ができるそこだった。

「って、窓開けてどうするのよ？」

もちろん逃げます。今日は事前収録だと言っててるじゃないか。

こんな姿、これ以上人に曝せるかっての。

皆には、自己嫌悪で立ち直れずそのまま自宅警備員に就職しまし

たと言っておいてください。

「引きこもんな！ てか、ちょっと待ってって！ 本気でどう收拾
つければいいのよ！？ って、ここ二階だから
全てチルチルに任せます。」

悲鳴のような叫びを背に、ボクは窓を乗り越えた。

こうして、我が校の声美少女伝説は始まった。

第三話 ・ ミツチイの日常 ・ (前書き)

【登場人物紹介】

・ボク：本編の主人公。エロくて、ネガティブで、下品で、卑屈で、姑息で、面白ければなんでも良いと思っている。最近、人には言えない悩みがあるらしい。

・チル：主人公の右隣の席の友人。アシスタント兼ツッコミ担当。

・ミツチイ：主人公の後ろの席の友人。

・リッコ：主人公の斜め後ろの席の友人。

・プリンちゃん：遙か彼方のプリン星からやってきたプリンセス。

アニメ声。チルより胸が大きい。

第三話 ・ ミッチイの日常 ・

最近、ふと疑問に思うことがある。

前の席のコイツの様子がおかしい。

いや、頭がおかしいというのはもはや自他共に認める周知の事実で、ヤツの遺伝子レベルで組み込まれた変えようのない不変の体質であり、そこには異論を挿む余地もなく議論することさえ馬鹿馬鹿しいほどのはつきりとした真理なのだが、それさえも鼻で笑い飛ばせるような愉快な事態が生じていた。

ヤツの行動は時々おかしくなる。体調不振を理由に、何かを隠すように、ヤツは姿を消す。体調が思わしくないというのはどうやら本当のことらしいが、時間場所状況に一切関係なく拳動不審になるのはどうか勘弁願いたい、オレまで同類に見られてしまうのではない。頭が変とか、行動原理が理解不能とか、それらを含めて、最近のヤツの様子は特におかしい。

「恋でもしたの？」

そう宣ったのは友人のリッコ。聞いた瞬間、オレの脇腹横隔膜の筋肉が痙攣を起こして引きつった。もしヤツが恋でもしようものなら、オレは逆立ちをして校内を一周したあげく下校途中のチルが毎日可愛いがっているタバコ屋のポンゴ（ダルメシアン、オス3歳）に求婚し庭付きの白い家で101匹の子供達と明るく幸せな家庭を築けるであろう。笑えない冗談だ。

アイツがおかしいのは何も様子だけではない。今も机に突っ伏して眠っている風だが、その姿は体調不良でぐったりと倒れている生徒の後ろ姿とさして変わらないように思う。具合が悪くて眠って誤魔化したいんだけど眠れない、いつも授業中眠りたくないのに眠ってしまうのに、眠りたい時に眠れないとはなんたるジレンマこの苦痛をどうしてくれようかウズウズと、居心地悪そうに腕枕にのせている中身が詰まってなくていかにも軽そうな頭のポジションを調整

している。

なんだ、いつもと変わんねーじゃねえか。授業の放棄具合も常時と違いは見受けられなかった。

それでも、オレの直感は何らかの違和感を伝えてきている。

それに初めて気づいた時、オレはオレ自身のことが信じられなかった。これまでの長いとも言いがたいオレの人生経験の中で培われてきたアイデンティティの全てが否定される思いだった。

あれ？ コイツって、時々なんか可愛くね？

これを絶望と言わずしてなんと云うべきか。

我が目を疑った。感覚を、直観を、理性と感情の全てを否定した。そして、そう感じる時に限って、コイツは挙動不審となる。

全ての事象に対して行動とそれに伴う結果がついてくるとは思えない、だがしかし、無関係とは考え難い。

コイツは絶対に何かを隠している。

しかし、そう感じるからこそが、オレの異常なのだろうか。

……あ、漫画が終わった。

漫画を読みながら柄にもなく哲学的な思考が働いてしまうのは、

読んでいる漫画の影響の強いところだろう。思考：漫画：授業Ⅱ5：

4：1、柄にもなく数学的な思考が働いてしまうのは、受けている

授業の影響が（以下略）。

さて、次の巻は……

と、自分の机の中を探った後、自分の一つ前の机の中に見つけた。

おい、次巻を貸してくれ、と前席の椅子を軽く蹴飛ばした。

前の小柄な影はモゾモゾと「うっぜーなこのクソチンカスが。そんなにたまってるなら勝手にぬきやがれ！」（脳内変換）とウザそうに机の中から手探りで本を探しあて後ろに手渡してきた。

受け取った本の表紙を見て頷く。うむ、エロスとは哲学的衝動を意味するものである。授業中に発射することはないが。

……

まただ、また違和感がある。ここ数日、何度も感じたことのある、

本を渡す時にチラリとこちらを振り返った横顔、後ろ姿の僅かな違い。

気にはなるものの、別にオレには男の後ろ姿を眺めて喜ぶ趣味はない。女の子の後ろ姿、髪を一つにまとめアップにした時に覗く項の生え際などは舐めまわすように眺めたい、むしろ舐めまわしたい。情性で、まるで女みたいに小柄な後ろ姿を眺めてから、再び本へと視線を戻した。

……別の巻じゃねーか。

たとえエロスを追及する本であり、ストーリー性のかけらもないような本ではあるが、順を追って読んでいきたいと思うのは誇り高き日本男児A型として当然の思考回路の帰結である。

おい、これじゃねえよ、別の巻をよこせ。

本の角で、前席男の脇腹を小突いた。

「ひゃあんっ！」

……

正直、かなりビビった。

周囲の空気が固まったのは、決して気のせいではない。

……おいこら！ なんだその女みたいな悲鳴は！？

黒板に近い席の学生達、オレより前列に座り正しく授業に集中していた連中はほとんど気づいていないだろう。遠い席の学生達も正確には事態を理解してはいなかったように思う、チラツと視線を送っただけで何事もなかったようにまた黒板へ意識を傾ける。

すぐ近くに座る学生達は、瞬間、完全に思考が停止していた。一部の学生はチルか誰かの声と勘違いしたようだったが、そのチル自身も隣の席を穴が開くように見つめていた。

悲鳴をあげたその本人は、かなり恥ずかしくなったようで誤魔化すように顔を腕で隠してまた睡眠体勢へと入った。ここで下手に言い訳を口にしなかったのは、ある意味正解だっただろう。

コイツ今どつから声出した？！

男が咄嗟に出せる声ではなかった。

しばらくして、オレの動悸もようやくと治まった頃、寝たふりを決め込んでいたヤツが頭を上げて、チラリとこちらを涙目で睨みつけてきた。

オレの鼓動は再び跳ね上がった。

「ばかあ！ そんな敏感なトコロつかないでよお兄ちゃん！」
(脳内変換)

小生意気な瞳が、そう語っていた。

その瞬間、オレは全てを悟った。

ここ数日の違和感。コイツの様子がおかしかった理由。拳動不審に見えた訳。その全てが一つに繋がった。

オレは愕然とした。こんなことが存在しているのか、自身の全ての人生と価値観、そして人類史の全てを疑う。今の今まで、何も気づいてこなかった自分自身の直感を疑う。これは全生命に対する冒とくだ、そんな気さえた。

拳動不審だったのは、コイツではない、オレの方だったのだ。

オレは妹属性だったのだ！

その衝撃の事実を突きつけた張本人は「ほれほれ、コレだろ、コレがほしかつたんだろ、このぶつとくてあつついのが！」というふうに、本を俺に手渡す。オレは直視できなかった。ふいつと視線を横に逸らす。

その様子がなお気に入らなかつたようで、ヤツはプリプリと頬を膨らませて前に向き直った。

なんてつこつた。茫然としながら、オレは初めて知った衝撃の事実を身に噛み締める。

……いやいや、待て待て！

コイツに妹を感じた、その事実こそが最も衝撃的なのではないだ

ろうか。冷静な自分が語りかける。理性が警告を発している。

そして、オレの視界からも、一つの警告があった。角膜に連結された視神経は、脊椎を通って脳髄へ達し、直観としての反射から直感の危険を知らせていた。

怒ったコイツは、今、いったい何をしている？

机の下で何かをゴソゴソとしていた。

次の瞬間、オレは耳を疑った。聴覚は信用できなかったが、やはりオレの感覚は正確だった、もう少しだけ己のシックスセンスを信じてみたくなった。

ぴぴぴ！ ミツチィ、私からの電話だよ！ 早く出て！

可愛らしいアニメ声で、オレのケータイが鳴いた。

教室全体が固まった。

気まずい空気を通り越して、視線が痛い。

あんのバカやろう！ なんつー爆弾を投下しやがったんだっ！？

そのままケータイを窓から投げ飛ばしたくなった。

わざわざオレを名指ししているあたりが、なんとも痛かった。普段全く使わないテレビ電話の着信に設定してあるあたり、かなり計画的で悪質だった。

プルプルと震えているのは、羞恥ではなく怒りと絶望からだったと思う。

当の爆弾を投下した本人は、至って冷静にニヤリと笑って、小憎たらしい視線を送ってくる。

オレって今、叫んじやってもいいよな？

止めるものは、もはや何もない。

オレの内に目覚めた妹属性は、わずか1分足らずで消失した。

ところで、あの声はいつたい誰のものだったんだ？

第四話 - 第2回ぷりんちゃん放送局 -

バリバリ、ボリボリ！

うめえ！

あ、それではバリボリ、本日の放送を始めますモグモグ、パーソナリティはもちろん

「食べながら話すな！ というか、カウントダウンしといてわざわざ口に入れるな！」

何言ってるんですかモグモグ、皆さんのんびりゆったり食事を取っている最中、我々だけが食べられないなんてなんてたる差別、なんたる虐待、こうして差し入れまで頂いたということは、もちろんこの場で食べるってことで。

「ないない」

むしろ食べてる音声を30分間垂れ流しにする方が、皆さんの食欲もいっそ増すというもので。

「増さない増さない、むしろ引くってば」

はいはい、そんなわけで今週も始まりました！

パーソナリティはもちろん、どうもボクです。

「アシスタントのチルです」

はい、サポートアシスタントというよりは、ツッコミアシスタントですね。

それでは、本日の放送もこの二人でつつがなくやっていきたいと思えます。

いや、何事もないって本当にいいものですね。

「ジジくさい」

いやいやそんな生意気な感想持つなら、一度その身で体験してみろっての。

「なんのことよ」

まあそれはともかく、最近、非常に多くの投稿が寄せられている

のですが、それらの投稿はだいたい同じ内容なんですよね。

『例のプリンちゃんは、もう出ないのか？』

そんなに出てたまるかっての……

あ、いや、なんでもないですよ。

姫はやんごとない身分であらせられるため、とても多忙な生活を送られています。そう一惑星の辺境の放送に度々出演できるわけがないじゃないですか。

ところで、このクッキーおいしいですねボリボリ。

「せっかくの差し入れなんだから、味わって食いなさいよ」

いいじゃないですか、ガッツリむさぼってもらった方が本望というもの。それに、皆さんご飯食べてるのに、我々だけ食べられないなんてズルイじゃないですか。

「……アンタ、さっきの休みに早弁してたよね？」

この差し入れは、今日の授業で、A組とB組の女子が合同で調理実習を行ったようで。他にもおいしい肉ジャガや、とても口では表現しきれないような非常に独創的な創作料理も頂いております。いったいどういう組み合わせなんでしょうね？（好感度を）上げていて落とすんですか？

「アタシに聞かないで……」

製作者にも分からなかったようです。というか、製作者自身にも理解されない芸術ってなんだかもの悲しいですね。

「芸術じゃない！ というか、それ作ったのアタシじゃないし」

まるで残飯処理機械の気分を味わいながら、この芸術品の作者はA組のRあたりだと推測します。

ちなみにその時間、男子は二ートのごとく暗いPCルームでマスカいて

「下品なこと言うな！」

失礼しました、皆さん食事中でしたね。

では、ボクもデザートに特製ミルクのたっぷりかかった立派なバナナを

「やめい!!」

ボリボリモグモグ、あ、もちろんバナナをボリボリ食るとかそんな痛々しいことはやってませんよ。少しカタチは歪なものですが、なかなかのおいしいクッキーですね。

「あ、それ、あたしが作ったの……」

……

……一瞬、眩暈がしました。

いえいえ、違う違う、そういう意味ではなくて、そんな怖い顔で睨まないでください、チル。

ただ、また今日も何故か激甘練乳抹茶ミルクを飲んでいるので、何か嫌な予感がこうヒシヒシと……

「ところで、アンタっていつもそれ飲んでるよね？」

はい。これはボクが好きなのではなくて、いつもパシリに行かせた下僕その一のミツ　いえ、2年A組のM君がこれしか残っていませんでしたと宣いますので、仕方なくいかにも胸やけしそうで胃もたれしそうな抹茶味の精力剤濃いめを飲んでいるだけです。おかしいですね、いつもチャイムと同時にまるでメロスのように駆け出していく男が、一番乗りで購買部に辿り着いていそうな彼が。つきつめると人間不信に陥りそうなので止めておきましょう。

……いやまさか、今日はラーメン食べてないし、今更そんな……

……

「な、何？　ま、まさか……」

(……チル。し、しばらく繋いどいて……)

(「え、ええっ?!　そんな、急に繋いでとか言われても……」)

(バ、バカ、マイクに入るだろ!)

「えええ……あ、うん……え……と。そ、そうですね、さっきの彼にご飯の前に拾い食いたみたいで、どっかイっちゃったみたいですよ。うん、決して、アタシのクッキーが原因とは思いたくない……

……

現実逃避しないでください!

「やっぱりか……」

はいはい、は〜い！ 皆さん、注目！

先ほどの彼は、原因不明の病原菌により下痢と嘔吐と眩暈と脱水症状に襲われたため急遽降板することになりました

「絶対アタシのせいじゃないよー！」

うつさい、黙れ！

というわけで、再び臨時登板することになりました、遠い遠いプリン星からの助っ人姫、プリンちゃんが登場です！ ワーワーパチパチ！

「なんだかんだ言つて、アンタ絶対楽しんでるよね？」

いえいえ、決してそんなことはないですよ。

1年くらい前からこの梅雨の季節まで、ジメジメとした大気と気分の沈んだ数か月間、投稿したくても斬新で新しいネタを思いつかずにネタを温めに温め続け、もう腐臭どころか幻覚まで見せれるようなキツイプリン臭を漂わせているプリンネタを公開できると思うと、胸がゾクゾクとこう

「姫、放送中です」

はっ！

どうも失礼しました。

なにやら変なオラクルを受信してしまったようです。

え〜、それでは、やっといつもの放送らしく、曲紹介の方へいきたいと思います。

今週紹介する曲は、なんとこの学校出身の方が作られたそうです

よ、すごいですね。

さっそく聞いていただきましょう。

タイトルは、『愛しの姫へ』。

(さ、ほら、エコーかけて)

(「え?! 今日曲は……?」)

あの日聞いた貴女の声に、魅了されました

姿は見えないけど、僕の瞼の裏には、はつきりと貴女の愛らしい姿が浮かびあがってきます

すぐに恋人になってくれなんて、そんな厚かましいことは口では言えませんが、どうか一度だけ会ってもらえませんか？

水曜日の放課後、屋上で待っています

放送部のプリンセス、プリンちゃんへ

ラーラー　　ラララー

「待てい！　ちょっと待て、本気で待て！」
「なんですか？」

「アンタが歌うんかい！」

もちろん！　ワタクシ、放送部の歌姫ですから。

「いつから歌姫になった？！」

先週、この手紙読んで爆笑してからです。

はい、お聞き頂きましたのは作曲・編曲・歌：プリンちゃん、作詞：2年B組のタナカくん

「待て待て！　これ、ラブレターじゃないの!？」

はい、しかもメールではなくて、しっかりとした便箋に直筆で書かれた、とても愛の込められた一通です。気持ちがかもつて、心にグツとくるステキな詩ですよ、いろんな意味で涙が出てきました。

「ガチラブレターに曲つけて歌うな！　公開すんな！」

うちに投稿しておいて、それで終わるはずがないじゃないですか。

「それに、これは放送の投稿ボックスに入れられたものじゃなくて、

一応アタシが預かったものだから、区別してアンタに渡したのに

」

届いてしまえば全部一緒です。

というか、どうもワタクシが投稿ボックスです。

「ごめんタナカくん、止められなかったよ……」

反省してください。

「アンタが反省しろ！」

あー、基本的にワタクシ、男には厳しいので、そのあたりは覚悟して投稿してきてくださいね。

それでは、またいくつかの質問メールに答えていきたいと思えます。

『姫の好きな食べ物は何ですか？ また、嫌いな食べ物とかあったら教えてください』

なんていうか、また穩便に普通のお便りを選んできましたね。

「な、なんのことかな……」

まあいいです。

そうですね、好きな食べ物はババロアです。

「やっぱりプリンじゃないんだ……」

そして、嫌いな食べ物はチルの手料理です。

「……」

先ほど床をのたうちまわって身体を引きずるように降板していた彼、その彼の談話によりますと、食べるだけで幻覚と妄想と強い高揚感によって感情がエクスタシーまで達し、その影響は肉体の変化となって如実に現れ、その励起状態を突き抜けた向こう側にはまづ常人では体験できないような夢の新世界が広がっていると聞きましました。彼は前回の放送日にちょうどその境地に達しており、今現在もその後遺症に悩まされているといえます。

「んなわけあるかい！ だいいち、アンタだっておいしいおいしいって、さっきもバクバク食べてたじゃない」

いやー、アンタって誰でしょうね。ワタクシはボクではなくってプリンちゃんです。

あ、ちなみに、チルは好物ですよ。

「……ふえあ？！」

ところで、今日ワタクシ、実はノーブラなんですよ。

「……だ、だから何？」

うん、どんなのつけてるのか、一つ参考にしたいなと。

ていうか、一度着心地まで確認しときたいなって思っ

「ちょ、ちょっ！ だから、なんでいちいちアタシのを……ま、待
って待って！ きゃ〜！！」

ガガッ！

……
ピ

……
さて、続いての質問メールです。

『姫とチルは、どっちがタチでどっちがネコですか？』

って、これはもう答える必要ないですね。

「ち、違う！ アタシはそんなんじゃない」

ちなみに、ワタクシの答えとしては両方可です。まあチルはライ
オンみたいなもんですから、どっちがどっちというわけでは……

「……」
「ごめんなさい、ちょっと調子乗りすぎました。そんな白い目で見
つめないでください。」

おい、こら！ リスナー、ちょっと自重しろ！

「アンタだ！」

というか、チルが自重して変な質問メールをまわしてこなければ

「良いの探してる間に、アンタが横から勝手に読むからでしょ。じ
ゃ、次はコレ」

はいはい。

『毎週とは言わないから、せめて月一くらいでコーナー化してくだ
さい』

無理ですね。

「即答すんな」

いえ、ただワタクシが出たくないとか、出たくないとか、出たく
ないとかそう言ってるんじゃないですよ。ただ、ワタクシ少くも

忙な身分ではありませんので、いつ出れるかなんて神様 もとい、大臣の顔色伺って地球にやってこなくてはいけないので、そう都合よく出られるものではありません。

でも、ワタクシ個人としては、放送部のアイドルとして、メインパーソナリティの彼をクビに追いやってもレギュラーを獲得したい所存ではありません。

「いつからアイドルになった？」

さて、それでは本日の放送は

「待つて、最後に一通、これだけは読め」

はいはい、なんですか、なんでも読ませて頂きますよ。

2年A組のミツチイ いえ、M君からの投稿になります。

『姫、ご相談があります。前の席の友人の様子が変なんです。いつものように授業中寝ていても「女体化が……不随意で、可逆で……」と、うわ言のように呟いています。何かの病気なのでしょうっか』

……

……いえ、彼も青春を生きる健全な男の子ですから、いろいろと悩みはあるのかと思います。M君は友人として、温かく見守っていてあげてください。困ったことがあるようなら、そつと手を差し伸べてあげてください。そして、抹茶味の精力剤はあまり与えすぎないでやってください。

「それから、この人、追伸がきてる」

『P・S・その友人は最近、何やら男気が足りないと云って筋肉を鍛え始め、ガチムチな動画や本に手をつけ始めました。何かに目覚めたのでしょうか、薔薇の香りがします』

って、目覚めるわけねーだろっ!!

……はっ!

すみません、何やらその友人の心の叫びが聞こえてきたもので。ともかく、その友人のことは、どうかそつとしておいてあげてください……

さて、最後になりましたが、いつものようにこの放送に関する質

問・リクエストなど、またはネタフリという名のご意見・ご感想は、いつものように掲示板への書き込みなどで受けつけていますので、どうかよろしくお願いします。

それでは、本日も臨時でパーソナリティを勤めさせて頂きました、プリンちゃんと、

「アシスタントのチルでした」
バイバイ！

ピ　ブチン！

第五話 - ボクの日常2 -

バシッ！！

ストライークッ！ アウト！

小気味良い音を立てて、ボールはキャッチャーのミットへと吸い込まれる。

バッターは「くそっ！」と小さく舌打ちをすると、ピッチャーを睨みつけながらベンチへと戻る。ピッチャーはマウンドを足で均しながら帽子を外すと、日差し of 眩しさに目を細めて額から流れ落ちる汗を拭いた。次の打者は素振りをしてしながらバッターボックスへと入る。ピッチャーは帽子を被り直して、再び腕を構えた。

最近のボクは、様子がおかしい。
今更、人に指摘されるまでもない。ボクがおかしいことくらい、ボク自身が一番よく分かっている。挙動不審な行動を取る度に、その中途半端でどっちつかずな態度に憤りを感じているのは自分自身だ。

パシッ！

ボール！

近頃のアイツは、どこか変だ。

そんな噂を耳にする。直接聞こえるのではない、言葉として話されているわけではない。ボクを取り巻く周囲の環境が、人々が、ボクを認識する視線が、どうしたんだろうと訝しむ表情が、ボクの虚飾と虚栄に満ちた危うい情緒を刺激する。これまで作り上げてきた世間体が嘘のように脆く揺らいでいる。

一通りの手は尽くしたはずだった。

予測可能な範囲で事が発生した場合における行動手順の確認、逃走と回避ルート の確保と安全性の問題、また不測の事態に陥った場合における最良な対処法の選定。全てを費やして最善の対策は練っ

た、しかし、原因が解明できなければ全ての策は後手へとまわり、自分に不利な状況へと傾く負の連鎖は止まらない。

原因と考えられるものは全て検証し、再現を試みる反復実験は繰り返して実施した。これまでの変調の兆しから統計を取り、最も確率の高い状況再現を何度も行ったが、原因解明には至らなかった。原因が外的要因ではなく内的な要因である可能性も考慮し、自分の感情、思考さえも制御を試みた。後席の友人から後ろ指をさされながら、「人の嗜好に口を出すつもりはないが、それはどうかと思う」と本気で憐れむような視線を受けながら、それでも肉体的また思想的にもガチでムチな男の中の男を目指すべく、心身ともに鍛え上げた。しかし、そんなボクをあざ笑うかのように、変化はアトランダムに現出し、決意と努力をバラバラに打ち砕いていく。

神様は今日もサイコロをころがす。

真正面にピツシャーを眺めるボクの視線が揺れた。

次に感じるのは気が遠くなるような頭痛。全身に毒がまわるように、強い熱風に当てられたようにボクの身体は熱くなる。汗が噴き出す。立ちくらみのように身体が重く感じる。飛びそうな意識の中で、狭まる視界にはピツチャーの振りかぶる姿が見えた。

カンッ！

歓声があがった。

気がつくと、ボクは片膝をついて座り込んでいた。視点が定まる頃には、身体の変調はすでに治まっていた。名残のようにトクトクと心臓が揺れている。張り付くような汗を砂交じりの風が撫でる。視界の端には、転がったバットを拾う影が見えた。

バットを揺らして次の打者が歩いてくる。それを茫然と眺めていると、隣から声をかけられた。

「おい、大丈夫か？」

マスクを上げたキャッチャーが、突然座り込んだボクを不思議そうに見つめている。

だ、大丈夫

返事をしようとして、慌てて言葉を飲み込んだ。問題ないと頷いて、手でうながした。

腰を上げて呼吸を整える。グラウンドを眺めると、先ほどのバッターはセカンドベースまで進んでいた。

大丈夫、バレてない。そう自分に言い聞かせた。

最近のボクは、運命の神様に嫌われていると思う。

授業中だろうが、仕事だろうが関係ない。下校途中に突然変わったことだつてある。ひよつとすると、眠っている間に変身していることだつてあるかもしれない。顔や体つきも少しは変化しているようだが、見た目にはほとんど変わらない。声さえ気をつけていれば、気づかれることはない。

男が女になるなんて、いったい誰が想像できようか。

ストライーク！

「うえっ！？ 今のとるのかよ！」

バッターが抗議の声をあげる。ピッチャーはグラブで口元を隠してニヤリと笑った。

頭の中は自分の体のことであらう。制服を着ていたのなら気にはならない、体操服のＴシャツと短パンという薄着が問題だった。

まずい、不味い、これは非常にマズイ……

顔は隠しようがないが、これは今までバレたことがないのでとりあえず良しとする。問題は胸。たいした膨らみではないとはいえ、これでもチルよりは大きい××カップ。××は秘密、絶対言わない。この前授業サボった時に保健室で測ったなんて内緒、自分の墓場まで持っていきます。胸を反らせば確実にバレそうだが、もともと大きめのシャツを着ているので、大人しくしていれば誤魔化せるだろうか。教室に帰る頃には戻るよね？

運命の神様には見放されたが、幸運の女神様はボクを見捨てていないのかもしれない。

何度か危うい時もあったが、今まで一度だつてバレたことがない。

チルには、まあ言い訳のしようもないくらい、目の前で変化してバ
れてしまったが、その時以外は特にイレギュラーな事態には遭遇し
ていない。時間の問題って気もするけど。

変化のきっかけ、原因さえ説明できれば。そう切に願う。

ッパシ！

ストライーク！

今度はピッチャーが目を丸くした。

「えええっ！ ウソだ、今のはボールだろ?!」

バッターが再び声を張り上げる。

ノー、ノー。静かにしてください、審判に逆らうとは何事ですか。
今それどころじゃないんです。

すると、次は監督まで駆け寄ってきて抗議をする。

「オマエ、さすがにそれはストライクおかしいだろ!？」

何を言う。ヨチヨチ歩きの幼女から還暦間近のおばあちゃんまで、
ボク的愛は幅広く

「ストライクゾーン広過ぎだろ!」

「誰だよ、コイツ審判にしたのは!？」

審判から引きずり降ろされました。

今はベンチに下がってゲームを眺めています。

これまで、体育の授業中に変わったことはないのですが、軽く動揺中。
膝を抱えて座っています。そういえば、体が変わって身体能力に変
化はあるのだろうか。腕を伸ばして手を広げる。手が小さくなった
とかそういう違いは見られない、もともと筋肉量の少ない細い腕
も差があるとは思えなかった。後で軽く体を動かしてみようかな。

広げた手のひらには、横からバットの柄を差し出された。ん、な
んですか？

「次、オマエの番」

ボクは審判で、どっちのチームにも入ってなかったはず。

「代打だよ、代わりに審判入ったヤツの」

バットを突きつけられる。仕方なくバットを杖代わりにして立ち上がった。

と、後ろを振り返って、手をあげてGMゼネラルマネージャーに自己申告をした。

先生、体調がすぐれませんが、保健室に行ってください。

「待って待って！ もう騙されんぞ。オマエ、何度そう言って授業サボる気だ!？」

いえいえ、今日はホントなんです。さっきも審判しながら、もう辛くって辛くって。

「じゃあ、今日はなんだ？ 頭痛も腹痛も、もう聞き飽きたぞ」

なら、今日は生理痛で。

「……」

……

ヘルメット投げつけられました。

本当にそうなる前に、元の身体に戻りたいです。いやマジで。

ブカブカのヘルメットを被ってズルズルとバットを引きずって、バッターボックスへと向かう。運動が嫌いだとか、めんどくさいとか、眩しい日差しなんかくそくらえエアコンのきいた部屋でゴロゴロしたいなあとか、そんなことは決して思っていないですよ。

7番、センターのマツモト君に代わりまして、遠い遠いプリン星からのピンチピッター、プリンちゃん！

あ、いえ、ウグイス嬢風に言ってみましたが、もちろん声には出してませんよ。

どっかの助っ人外人のようにバットをふりふりお尻をふりふり、ピッチャーに向かって大きく構える。そんなノリノリのボクを見つめる視線を近くから感じた。キャッチャーの男が、構えるのも忘れてボクの方を見つめていた。

「オマエって、なんか……いい、いや、なんでもない」

首を振って、気を持ち直してマスクを被った。

ちなみに、プロの野球選手は女性みたいに内股に構える打者が多い。その方が重心が安定し、軸がぶれないのだそうだ。……大丈夫、

バレてないバレてない。軽くバットを素振りして、コツリとキャッチャーマスクにバットの頭をぶつけてやる。その目腐ってんで。

キャッチャーが構えるのを確認すると、ピッチャーは腕を振りかぶった。

きゃー！

ボクは思わず尻もちをついた。小さな悲鳴が口をついて出る。

……

「……」

おいこらピッチャー、内角深過ぎだ！

一人だけ、ボクの悲鳴が聞こえたであろうキャッチャーが驚いたようにボクを見つめている。気まずい視線が交差する、ボクはヘルメットを深く被り直した。

もういいや、適当に空振りしておこう。打球を見送る。

多少声を出すのは問題ない、低い声を意識して、大きな声を出さないようにすれば誤魔化せる。電話やマイクに向かう放送でなければ、意外になんとかなるもんだ。ただし、油断して声を出すと、楽に地声を出そうとすると、バカみたいに高い声が出てしまう。「見た目も声も、まるで小学生の女の子みたい」とはチルの言葉、その小学生に胸で負けているのはどこの誰ですか。

ほいつ、とバットを振って、空振り三振バッターアウト。

するとベンチから声があがった。

「走れー！」

……は？

思わずキャッチャーの男と目を見合わせる。ミットにボールは納まっていなかった、コロコロと横に転がっていく。捕逸、パスボール、このキャッチャー、ボクのお尻ばっか見てないでボール見るよ！ バットを捨てて駆け出した。

「振り逃げだー！」

ヒイヒイ言いながら、ボクはファーストベースに走り込んだ。

「セーフ！」

一墨墨審の言葉に、ベンチからは歓声があがる。

キャッチャーはスマンと謝りながらピッチャーマウンドへと向かう。二人でヒソヒソと話して、次の作戦を練っているようだ。

ドキドキ。

思わず走ってしまったが、これは非常にマズイことがわかった。

ぎゃー、む、胸が、乳首がー！

ボクは心の中で悲鳴をあげている。大袈裟にも揺れるとは言い難い小ぶりの胸だが、その先端に付着する感覚器の敏感な反応はかなり異常だった。

そんなボクに、ベンチからやってきた監督が話しかけてきた。

「よくやった！ ノーアウトのランナーだ。その調子で頼む、お前の足なら二塁狙えるだろ」

ヤです、めんどくさい。

そんなボクらを見て、バッテリーはかなり警戒を強めている。

走れないのは今実証したところです。もう、ボクを走らせないでください。

「そんなこと言うなよ、オレ達の勝利がかかっているんだ」

かかっているのは、メシ代か何かですか？

「よくわかってんじゃないかねーか。だから、な、頼むよ」

そんなこと言ったって、審判やってたボクには関係ないことだし。

「バカ、今日のはそんな安いもんじゃないんだよ！ 前回のゲームのかけ金が倍プッシュユされてんだ！」

バカだ、コイツ等本気でバカだ。そうか、それで今日は皆が真剣なんだな。かけ金がどこまで膨らんでいることが。

バッテリーが戻り、こちらを少し気にしながら再び投球を始める。「もちろん山分けとはいかないが、オマエの分け前も出さず。なん

とかこの回、勝ち越せれば！」

ふとセカンドベースの方を見ると、セカンド守備のミッチィがニヤニヤと笑っているのに気がついた。

んなこと言ったって、こっちは体調が悪いんだよ。

監督もミツチイには気づいたようで、顔をしかめて再び説得を試みる。

「いや、今回はかけ金が大きいから……」

ジューズくらいで動く気はないなあ。

と、ミツチイは指を一本立てた。ボクも監督も気づく、あれは食券1枚のサイン。

同じ食券1枚なら、動かない方が楽だよな。チラリと監督を見る。

「くっ……じゃあ、オマエがホームベース踏めたら、に、2枚！」

ミツチイは指をさらに立てる。

3枚。

「5枚！」

ボクはベースを蹴った。

「走った！」

「いきなりいったぞ！ 早いつ！」

バッテリーの隙について、ボクは楽々セカンドベースへ滑り込む。お尻についた砂をパンパンと払って、膝に手を置いて再び構える。

よし、ばっちこーい！

「オマエ……」

セカンドカバーに入ったミツチイが、呆れたように呟いた。

ていうか、どんだけ配当金高いんだよ。

「フツ、借金を焦げ付かせちまってな。これ以上増やすと、あとはもう脱ぐしか」

胸を張って言う。いや、褒めてないから、威張るな。

しかし、買収がバッテリーにもバレたらしく、警戒はいつそう強まった。そうそう、ボクって小柄なだけにけっこう足には自信があるんですよ。体力はないけど。女体化していても、それほど身体能力に差はないようだった。胸さえ気にしなければ。

油断すると、また牽制球が飛んでくる。ベンチからは、チームメイトからピッチャーへのブライニングが聞こえてくる。いいぞ、もっとやれ。

次は厳しいか。だが、次の塁まで進んでおけば、犠牲フライでも点が入る。

僕は、近くにいるミッチィに声をかけた。

ミッチィ。

「なんだよ」

ボクはミッチィの背中に回り込む。可愛い声を意識すると、耳元で囁いた。

これ、なぐんだ？

むにつ。

背中から抱きつくように、ボクは胸を押しつけた。

……

「……」

ベースから離れたこんな隙を見逃すはずもなく、ピッチャーからの牽制球が飛んでくる。

ボクは走り出した。

「ミッチィ！」

「うお！ スルーした！」

ミッチィは固まっていた。

センターがカバーに入り捕球するが、ボクは楽々サードに辿り着く。

ベンチからは大歓声。ミッチィは頭に疑問符を浮かべながらチムメートに叱られている。

さて、ここまでは自力で来れたが、これ以上はさすがに進めない。仲間のバットに期待してチャンスを窺う。

しかし、そう簡単にはタイムリーは打てない。先ほどまでのミスで守備は固くなっており、バッテリーにも隙が見られなかった。あつという間に2アウト。くそ、バッテリーを現役野球部で固めるのは反則だ。

バッテリーを見る。ダメだ、まるでタイミングがあってない。期待はできん。食券5枚が〜。

監督に視線を送る。せっかくのチャンスにヒットが出ず、かなりヤキモキしているようだ。しばらくして、ふと視線がぶつかつた。ボクは三塁手に気づかれぬようサインを送る、ホームベースを指差した。サインに気づき眉をひそめるが、こちらの意図に気がつくに驚いたように首を横に振った。頼む監督、やらせてくれ！

何もしないよりは、何か動きたい。ボクには幸運の女神様がついている。

諦めたように、すぐにGOサインは出た。

ボクは走り始めた。誰かの叫び声が聞こえる。

「ホームスチールだと！」

「バカな！」

通常、こういった場面では本盗ではなくスクイズを仕掛けるのが定石。しかし、2アウトでバッターにも期待できないなら、もう走るしかない。少しでもバッテリーが警戒していれば確実に失敗する無謀な賭け。

ただし、勝算がないわけではない。

ボクは叫んだ。

ターナーカーくん！

ガチラブレターまで書いた男、キャッチャータナカの反応は早かった。

「姫えー!!!」

声だけで気付くとはさすがタナカ、振り返りながらそれでもミットにボールを納めるとはさすが野球部副主将。まるで抱きしめるように両手を大きく広げる。ぎゃー！

だがしかし、それでは構えが甘い。

死ねえ！

ボクはスライディングを仕掛けた。左足でベースを、そして偶然を装い右足でキャッチャーの股間を狙って。

そして。

哀れキャッチャータナカは泡をふいて沈黙した。

食券ゲットだぜ！

ちなみに、この日以来、ミツチイとキャッチャータナカの二人からの妙な視線を感じるようになった気がする。気のせいだよね、気のせいだよね、絶対バレてないよね？！

第六話 - 第3回ぶりんちゃん放送局 -

「……はい！」

「……はい、はい！ 姫、放送始まりましたよ！」

「……あ、えーと……その……」

「……ア、アタシが悪かったから……」

「……お、お願いだから、何か喋って……」

「……相変わらず、チルはアドリブに弱いですね。
「うう……」

はい、皆さん、ちょっと聞いてくださいよ！

ワタクシは今、大変怒っております。腹を立てております、ご立腹です。絶対の服従を誓っているはずの我が王国から裏切り者が現れました、離反者です、反逆者です、テロリストです。別に誰がとは言いませんし、確たる証拠があるわけではありませんので、大切なワタクシの家臣を疑うなんてそんなことは絶対にできないのですが、それでもワタクシは一言言いたい。ワタクシの家臣への信頼は全てムダだったのかと。

「家臣じゃないもん」

そう、姫と家臣ではなく、身分の垣根を越えた友、この星でできた初めての友達、共に放送を盛り上げる相棒、時には愛人であり「愛人なんかじゃない」

ともかく、ワタクシの一番の信頼を裏切ったのです。

「……」

実は、今日の放送にワタクシが出るという噂が、今朝から巷で流れていました。まあそれ自体はよくあることで、別にその通りになるわけでもないので勝手に言ってるって感じなのですが、今回はそれだけではありませんでした。なんと、内部機密であるはずのワタクシの日程が外部に漏洩していたのです、リークしたのです。おかげで、放送開始直前には放送室の前にワタクシを一目見ようと人だかりが。

「し、仕方ないでしょ！　べ、別に悪気があったわけではないんだし」

悪気はなくても罪は罪です。

「そ、それに、アタシはアンタが出るなんて一言も言ってるもないもん。ただ、さっきの授業で、最後の最後にそうなってたから『ひよつとしたら出るかもしれないね』って」

それを言ったのがチルだから信憑性が裏付けされて、噂に尾びれ背びれ羽根までついて校内中を右往左往飛び回ってたんじゃないですか。少しは自分の言葉の影響力を理解して、責任持って発言してください。

「はい……」

おかげでトイレに寄る暇もなかったじゃないですか。いつもならシモベその一に頼んで買ってきてもらうジュースもないし。

「それ、抹茶ミルクだよな」

何言ってるんですかチル。それはメインパーソナリティーの彼のこと、ワタクシのことではないですよ。まあ、抹茶味の精力剤濃いめを飲んでも、今のワタクシには出すものなんてないんですけど。チル相手に限定すれば、女であるワタクシにもきつと想像と妄想と幻想の壁を打ち破って熱いミルクをチルの頭からぶっかけ

「やめろ！」

でも、それももう終わりです。ワタクシの信頼を裏切った罪は限りなく重いです。家臣失格です、コンビ解消です、捨てちゃいます

愛人になんてもう絶対してやりません。

「家臣じゃないもん、愛人なんかじゃないもん」

クビです、ワタクシはもう新しい優秀な家臣を探すことにします。

「……」

はい、それでは今から、ワタクシ専属メイドを雇う公開オーディションを行いますので、我こそはと思うリスナーの方は奮ってご応募してくださいね。

「……」

……な、なんですかその目は。

「……ねえ」

はい。

「確かに迂闊に喋っちゃったのはアタシの責任だし、悪いと思ってる」

うむ。当然です。

「でもさ、一緒にここで放送する相方が、ホントにアタシじゃなくていいの？」

……

「……」

……

「……」

……ご、ごめんチル！ ちょーし乗っちゃってごめんなさい！

お願いだから、ワタクシを捨てないで！

「きゃー！ わ、わかった、わかったから！ 抱きつくな、服を脱

がすな、胸を揉もうとするなー！」

ワタクシの相棒はチルチルだけです、もう浮気なんてしません！

「きゃー！ だ、だからブラの中に手をおお」

ピ　ブチン！

……

……

はい、放送事故が多いことでお馴染みの我が校名物、ぷりんちゃ
ん放送局本日も始まりました〜！

「はあ、はあ……か、勝手に名前を付けるな！」

メインパーソナリティはもちろん、最近メインの彼を押しつけて
投稿ボックスにもメールが殺到しているで噂の、遠い遠いプリン星
からやってきたプリンス、プリンちゃんです。

「アシスタントのチルです。というか、ねえ、アタシ本気でこの番
組降りてもいい？」

ダメです、却下です、認めません。

ちなみに、メインの彼が今どうしているのかというと、先週に引
き続きチルの手料理にあたり寝込んでいるらしく

「寝込んでない！」

じゃあ、彼はどうしてるんですか？

「そ、それは……」

……

「……」

……はい、その彼は、チルに千尋の谷に突き落とされてライオン
と格闘しているらしいです。というか、一度チルを千尋の谷に突き
落とした方がいいような気がしてきました。

「うう……」

チル、落ち込んでないで、プリンでも食べて元気出してください。

はい、あ〜ん。

「ちよ、ちよっと。やめてっば」

そうそう、コレについてお礼を言わなければいけませんね。

どっかの誰かさんのせいで、今日はワタクシが出るとい話にな
ってしまいましたので、優しいリスナーさんからなんと差し入れを頂い
ております。皆さん、本当にありがとうございます。

なんと、おいしいプリンを頂きました。

いや〜、あれだけワタクシはババロアが好きだって言ってるのに、
しっかりプリンを差し入れしてくるあたり、リスナーもさすがとし

か言いようがありませんね。ほらほら、チルもいちいちへこんでないで、はいあ〜ん。

「むぐむぐ、おいしいけどさあ」

もちろんワタクシ、プリンも大好物ですよ。でも、贅沢を言うなら、ふつうのプリンより購買で売ってる1個58円のミルクプリンの方が好きです。

「ああ、アレおいしいよね。値段も安いし」

この差し入れに頂いた高級なプリン（1個98円）もおいしいのですが、ミルクプリンのあの安っぽい味がなんとも。

「安っぽいプリン姫ね」

う。チルのくせに、なかなか鋭いツツコミが入りましたよ。

わかりました。こんなワタクシがプリンを名乗るなんておこがましい、これからは改名いたしましたしてミルクプリンちゃんを名乗るところ。

……は！ き、きました、今なんか神が降りてきました、オラクルです。

改名、改め洗名、（乳ではなく竿から出てくる意味的な）ミルクプリンちゃんを名乗ることに

「やめい！！」

熱くて濃いのがいつぱいかかってて、ドロドロでネチャネチャでもう涙目なカンジのミルクプリンちゃんが

「いいこと思いついたみたい、嬉しそうに言うな！ 変な電波受信してんじやない！」

ごめんなさい、自重します。さすがにそんな洗名はやです、違う意味の極楽浄土に連れてかれそうです。

ほらほらその男子、竿立てるのは自重しなさい。立てるのは、後でこっそりトイレに行つてからにしてください。

「下ネタから離れる！」

それがですね、チル、さっき放送開始前にトイレに行けなかったせいで、どうも下腹部のあたりがムズムズと。

「我慢しなさい」
なんてひどい。

「ところで、さっきあんなに入口に人だかりが出来たのに、アンタどうやって放送室に入ったの？ アタシも中に入るの相当苦労したんだけど」

ふっふっふ、よくぞ聞いてくれました。

なんと、人だかりが出来る前に、先に入っていたのです。どうですこの素晴らしい先見の明。噂が飛び火する前に慌てて飛び込んでおいたのです。そのせいで、今ワタクシの膀胱がレッドゾーン突入状態ですよ。

「我慢しなさい」

ひどい。鬼ですね。

そういえばワタクシ、地球に来て一度やってみたかったことがあるんですよ。地球の女性陣はいつもやっていると言われているので、これは是非一度体験してみたいなと。

「……何？」

連れション。

ねえねえチルチル、一緒にお花つみに行かない？

「可愛く言っても行きません、というか行くな」
つれないですねえ。

はい、ではリスナーの皆さん、誰か一緒にお手洗い行きま
「放送使って募集すんな！ トイレに人を殺到させる気か！」

チル、おねがいく！ もれるう〜！ もう一生のおねがいだから
く！

「一生のおねがいをこんなところで使おうと
え、は、はい！
ん、なんですか？」

何やら、連絡が入ったようです。

……はい、どうやらティーチャーストップがかかったようです。

『多少の暴走には目を瞑るが、お前ら食事中に下ネタはやめろ』
とのことです。はい、ホントすみません。

「うう、すみません」

『多少の暴走には』ってあたりが、なんて寛大な処置なのでしよう。先生方の懐の深さに感激です。

「こ、こんな下品な放送じゃなかったはずなのに……」

何言ってるんですか、パーソナリティにワタクシを起用してる時点で、すでに方向性は決まったようなもんです。

はい、それでは放送の初心に帰りまして、今週の曲紹介を行います。

今週の曲は……いえ、そうですね、先に曲だけ聞いて頂きましょう。

どうぞぞ！

(さ、チル、この曲をかけて)

(「何、ケイタイにデータ入ってるの？ こういうのは、放送始まる前に渡し」)

キミを思うと、私の心は張り裂けそう

たとえ結ばれない運命だとしても、この気持ちに偽りはない

渡すロザリオがなくとも、キミは私のたった一人の妹

愛しくて、恋しくて、キミを思って私は心を濡らす

ああ、ユリちゃん、私の可愛い子猫ちゃん

どうか、泣かないで 私はいつも、そばにいるから

「……なにこれ？」

それでは、この曲はリクエストを頂きましたので、メールの紹介をしたいと思います。

『姫様、アシスタントのチルさん、はじめまして。1年のユリといえます。前回の放送で、姫様は素晴らしい歌声を披露されておりましたが、姫様は女性なので男性の心を説いた詞は似合わないと思います。なので、姫様には是非、こちらの詞を歌っていただければと思います投稿しました。もし読んでいただけたなら、天にも昇る思いで

す。i P O に入れて毎日聞きます。これを聞きながら、姫様を思いながら毎晩します』

というメールが届きましたので、期待に応えてみました。作詞：ユリちゃん、作曲・編曲・歌：ぷりんちゃん、タイトルは……：そうですね、『自作自演の想い』という事です。

いったい何を毎晩するんでしょうね、チル。

「お願い、アタシに聞かないで……」

それからこの子、追伸があります。

『P・S・ 姫様、ユリ夜はいつでも空いています。チルさん、絶対負けませんから！』

チル、マジできちゃいましたよ、変態です、キチガ です、マジキチです。

「リスナーにマジキチ言うな」

しかもチル、目の敵にされちゃってますよ。

「ちょっと待って！ ホントにアタシはそんなんじゃないから！」でも、ワタクシの愛人という説が公然の秘密として。

「皆さん、聞いてください！ アタシ、本当にそういう趣味はないですから。休み時間の度に聞いてこないでください。投稿してこないでください」

チル、夜道を一人歩く時は気をつけてくださいね。

「……」

はい、それでは、その他のメールを紹介していきますよ。

2年B組のマツモトくんから頂きました、ありがとうございます。「ありがとうございます」

『姫様、はじめまして。野球部2年のマツモトといいます。今日は姫様にお願いがあって投稿しました』

はいはい、なんですか？

『今度の試合で、姫様にウグイス嬢をやって頂くことはできませんか？ うちの副主将が姫様に骨抜きなため使い物になりません、なんとかしてください』

というメールです。

ウグイス嬢ですか、やってあげたいのはやまやまなんですが、ワタクシの地球での滞在時間がちょうどその試合の時になるかどうかは神様 もとい、うちの大臣と相談してみないことにはなんともていうか、実際のところどうなのチル？ 今度の試合ってアレでしょ？

「日本高野連に直接交渉してください」
投げやりですね。

「事前にスターティングメンバー聞いて録音しとくとか、応援メッセージ吹き込んでくくらいならできそうだけど」

じゃあ、エコーかけて。今から言う。

がんばってね、マツモトくん。プリンちゃんを甲子園につれて
って！

はい、これでバッチリですね。

「マツモトくんは、その副主将さんに虐められそうだけど」

副主将さん、ほどほどにしてあげてくださいね。

「これだけでいいの？」

なんと、これ以上のご奉仕が必要だと？！

わかりました。我が校が地方予選を勝ち抜いた暁には、ワタクシ
自らが応援に駆けつけます。

「言い切ったわね……」

大丈夫ですって。うちの学校がそんなに強いはずが。

「去年の試合見てないの？ 奇跡的にベスト4までいったから、
今年はいよいよとしたらって」

……その微妙にリアルな数字が恐いです。

「もし全国行ったら、変装させてでも連れていくからね」
い、いや、さすがにそれちょっと。

「応援団の方々、チアガール1名追加で」

待つて待つて、ホントにワタクシ、いるかどうかわかんないし。

「その時は、代わりにメイソンの方の彼に女装してもらいますので」「無理だ！ 横暴だ！ そんなん見たつて誰も得しないし！

「大丈夫、それはそれで似合いそうだから」

そういう問題じゃ

「はい、じゃあ最後にこのメールを」

キーツ、チル覚えてなさい！ 後でベッドの上でヒイヒイ言わせ
てやるわ！ ……はい、メールですね。

2年A組のミツ いえ、M君からの投稿になります。常連さん
ですね。

「姫、またまたご相談があります。先日お話した彼のことなのですが、最近はあるほど嫌がつてたチルの手料理を懇願してまで大量に
食べまくつてたり、まずいまずいと言いなながらラーメン食べてマラ
ソンしたり、もうどうしようもありません」

……いえね、彼は現在の状況を打開しようと思死なんです。その
努力はどうか認めてあげてください。

「それだけでなく、毎日あれだけ飲ませ続けた激甘練乳抹茶ミルク
を、それに飽き足らず何本も買占め飲み続けているようです。もは
や中毒の禁断症状としか考えられません。嫌がらせをしてきた張本
人としては胸が痛みます」

つて嫌がらせなんじゃねーか！！

……いえ、彼の心の内を代弁したままで。もう経過報告はいい
ですから、たまには抹茶ミルク以外を与えてやってください。きつ
と違つたりアクションが楽しめると思います。

それでは、また最後になりましたが、いつものようにこの放送に
関する質問・リクエストは掲示板への書き込みなどで受けつけてい
ますので、どうかよろしくお願いします。

本日もパーソナリティを勤めさせて頂きました、ミルクじゃない
よ、プリンちゃんよ、

「愛人じゃないよ、チルでした」

ねえチル、一緒におトイレ行かな

ピ ブチン！

第七話 - ボクの日常3 -

カタンコトン カタンコトン

最近のボクは、徐々に達観しつつあった。

どれだけ足掻いても変わらない、どんなに努力を重ねようと全ては水の泡、決して思惑が実ることはない。原因が分からなければ、きっかけも何も掴めない、まるで雲をつかむような話。それはもはや、避けることのできない運命、逃れられない宿命、ラプラスの悪魔に定められた唯一絶対の道しるべ。

家だろつと学校だろつと、ところかまわず変わってしまったこの変身体質は、もうどうしようもなかった。人間の順応能力、慣れというものは恐ろしい、最近ではそれほど慌てなくなつたし、状況を楽しむ余裕さえ出てきたほど。

カタンコトンと、電車の心地よい揺れに身を任す。休日の街の中心部へと向かう電車の中、それほど乗客は込み合っており、まばらに空いた席の一つにボクは鞆を抱えて座っていた。

なつてしまうものは仕方ない。ならば、その後の行動の選択肢を増やしておくのは悪いことではない。

先ほどから頭の隅に感じる違和感、思考をしながらその無視できなくなつた変化にどうにか言い訳のように折り合いをつけて、身体全体へと広がる変異の兆しを受け入れた。

慣れたとは言っても、それは日常の生活行動範囲圏での話であつて、こんなイレギュラーな事態に対応できるほど、ボクの神経は図太くない。

うっ……

声をもらさないよう口を嚙み、鞆を小さくキュ〜つと抱きかかえて、気が遠くなりそうなその感覚にボクは耐え続けた。

カタンコトン　カタンコトン

ご乗車ありがとうございます。次は

車内アナウンスが耳に届く頃には、肉体的変化は終わっていた。全身にうつすらと汗をかき、荒い呼吸をしている。もぞもぞと動くボクが気になるのか、隣に座る男性がチラチラとこちらの様子を伺っているような気がした。少し苦しい声ももれていたのかもしれない。

胸にある違和感を誤魔化すように、ボクは再び鞆を抱き直した。何度変身しようと、決して慣れることはないこの感覚。座席に座らず立っていたなら、耐えられず座り込んでいたかもしれない。比較的静かな車内、寝ている乗客も多い。なんとなく様子のおかしい乗客の雰囲気というのは伝わるものなのだろうか、ボクへと向けられる視線をいくつか感じていた。

え、あの子って男の子？　女の子？　やだわ、最近では中性的な子が多くって……。向かいに座る年配女性の遠慮ない視線を感じる。居心地が悪くなって、小さな身体をますます縮込ませて、ボクは寝たフリを決め込んで早く駅に着くことを願った。

目的の駅に辿り着くと、ボクは慌ててトイレに駆け込んだ。顔を洗って少し落ち着いた。まさか逃げ場のない電車の中で変身するとは……。視線は感じたが大事には至ってないので、とりあえずよしとする。

後からトイレに入ってきた男性は、ボクの顔を見て一瞬ドキッと表情を変える。しかし、ボクの服装を見て、首を傾げてボクの後ろを通り過ぎる。

男に見えてる、よね……？

鏡に映る自分はいつもの自分。いつもの女性化した自分。自分で自分を眺めても、男の時と大きな変化は感じられない。確かに体格は縮んでいるようだ、大きくなった上着のおかげで胸は誤魔化せている。しかし、いつもの学校で変化する時のように男子用の学生服を着ているわけではないので、いつもより女に見えないこともない。

思った以上に、男子の服を着ているという先入観が重要だったのかもしれない。

っていうか、どうしょ？ このまま、女のまま用を足しちゃっていいのだろうか？

越えてはいけない一線のような気がする……

ドキドキ。

と、突然ポケットに入っていた携帯電話が鳴った。

慌てて通話ボタンを押した。

ごめん、ミツチイ！ 今、駅着いたとこ。少し遅れる

急ぎ話したところで気がついた。

先ほど用を終えた男性が、隣の手洗い台で、ギョツとしたようにこちらを眺めている。

『……』

電話口の向こう、返ってきたのは長い沈黙だった。

そして。

『ごめんなさい、間違えました！』

電話は切れた。

驚いていた男性も、何か慌てたようにそそくさとトイレから出て行った。

はあ……

出て行った男性を見送って、今日何度目かのため息をついた。

鏡を見ると、やはりそこに映っているのは、物憂げな少女の横顔だった。

再び鳴り続ける携帯電話はスルーして、少し顔を赤くしてからトイレを出ると、目の前を通りかかった女の子が驚いて目を丸くする。すると、何を思ったかその女の子は、ボクの腕を掴むと隣の女子トイレの中へと連れていく。

キャ〜キャ〜、ドキドキの初体験！ と、はしゃぐ余裕は全くなかった。

その女の子は、ボクを向き直って話す。

「キミ、女の子だよな?! なんて男性用トイレから……」

本人も少し動揺したように話す女、このお節介やきの女にはどこか見覚えがあった。

同じクラスのリックコじゃん。

「その格好、男装のつもり? 全然隠せてないよ」

苦笑しながら話す。

いや、自分本当はオトコですから、そう素直に話すことはできなかった。

いえ、寝ぼけて間違えちゃって……。無難に言い訳をしておく。

「そうなの? 普通寝ぼけてたつて間違えるようなことはないと思うんだけど。これはかなりのドジッ子ね」

ドジッ子認定されました。

というか、リックコのやつ、ひょっとしてボクのこと気づいていない……?」

ボクらの後に入ってきた女性は、一瞬こちらを見て驚いたような顔をするけど、すぐに何事もなかったように奥へと入っていく。普通に男の格好をしているはずのボクが、正しくそこにあるべき姿であると周囲にはそう認識されているらしい。いや、その、なんかもう、ホントすんません。心の中で謝罪する。

そして、次に入ってきたのは、ボクもよく見知った顔だった。

「リックコ、どうしたの? 慌てて駆け込んで……」

ボクに気づいた瞬間、その女の子は固まった。

チルだった。

はる。少し心に余裕の出してきたボクは、飛び切りの笑顔を向けてやる。

その後の彼女の行動は素早かった。グワシとボクの腕を掴むと、慌ててトイレから外へ出る。壁に押し付けられると、まるで恐喝されるように胸倉を掴まれた。

「な、ななな、な、なんでアンタがトイレにいんのよ!?!」

かなり動揺しているらしい。

いえ、用を催すのは自然の摂理です。

「いや、そうじゃなくて、なんで女子トイレのいるのかって!?!」
や〜ん、ワタシ女の子ですよ? とぼけて言ってみる。

ガシツ!

胸を掴まれた。い、痛い痛い! そ、そんなにくらい自分には掴む
ほどないからって……ぎゃー、いたいたい!!

素直にリッコに連れ込まれたことを説明すると、ようやく開放さ
れた。よ、予想外に痛かった、これは男のゴールデンボールを握ら
れるのとどっちが痛いのだろうか。

「んなこと知るか!」

ちなみに経験者としては、どっちかっていうと、やっぱり後者の
方が。

「誰も聞いてないから」

いつものような会話をしていると、遅れてトイレから出てきたリ
ッコが怪訝そうな顔でこちらを見ていた。

「ねえ、キミって、もしかして……」

ギクリ! ば、バレた!?

思わずチルの背中に隠れる。チルも庇うように二人の間に入るが、
お構いなしとリッコは顔を覗き込んでくる。

「ひよつとして、学校で噂のプリンちゃん?!」

両手を握られた。

そりゃあ、この声とチルとの漫才みたいな会話を聞けば、そうい
う結論になってもおかしくない。

「あれ? でも、なんかどっかで見たことある顔のような……。キ
ミ、同じ学校に兄弟とかっている?」

い、いませんいません、兄弟なんていませんよ、いえ兄弟ならプ
リン星で王子やっています、はい。慌てて答えて、再びチルの影に隠
れた。

「ふ〜ん、なんかおもしろい子だね」

あう、また変な設定が……

「それよりさ、プリンちゃんは今ヒマなの？」

あうあう、素でプリンちゃんって呼ばないでください。本気で恥ずかしくなってきた。

「今日はチルと一緒に買い物に来てただけ。アタシ達と一緒に、お店見てまわらない？」

リッコの突然の発案に、ちらりとチルの様子を伺った。もう好きにしてと、諦めた表情で彼女は頷いた。

いきなりの展開に少し驚いたが、これはチャンスでもある。

一人では入りにくい店にも行ける。滅多にない機会なので、利用できるものは利用する。

ウィッグを買った。

どうせ変わるなら、完璧に変身すべきだ。ポリウームの増した髪をツインテに結わい付けて「いや〜ん可愛い！」と上から目線でリッコに頭撫でられるのもこの際目をつぶる。男の時でもリッコやチルには身長で負けているので、これは仕方ない仕方ない……服を買った。

安いスカートを一枚。Ｔシャツやズボンなどであれば男性用女性用に差はほとんどない。今着ているズボンにシャツも、男の子っぽいという格好であって、女の子が着ていても決しておかしくはない。どうせ変身するなら、完璧に変装すべきだ。重要なのは、たとえ知り合いに出くわしたとしてもボク「ワタシと気づかれないこと。女の子の象徴であるスカートをはくことによつて、女であることを印象付けることができる。チルに白い目で見られながらも、いかにも女の子らしい可愛いスカートを購入。

……ごめんなさい、ただなりきってみただけです。

「そんなに気に入ったのなら、着替えていく？」

リッコにそう言われたが、このままでは着れない理由があった。

今日の買物の本命、先の二つは別に買わなくてもいいが、次のモノはどうしても購入しておく必要があった。そもそも普通の服く

らいなら一人でも買える。女になっても、心まで女になりきれない自分としては、気心知れる誰かに一緒に行ってもらうしかなかった。うんざりしたような表情を見せるチルに、その必要性と重要性を説き、決して色目は使わないと強調してようやく許しを得た。

いざ行くは禁断の地、男が踏み入れることは叶わない秘密の花園、夢にまで見た幻想の楽園。

色とりどりの下着が並ぶ、ランジェリーショップへと入った。入って早々に、ボクは店員さんに声をかける。

すみませ〜ん、さらしくださー

「あるかそんなもん！」

チルにつっこまれる。

いや、とりあえずさらし巻いて胸を隠すつてのが、お約束かなと。当然、ただの下着屋にさらしなんてあるはずもなく、普通に上下ワンセットの購入が目的です。下はともかく、上はブラがないとTシャツ姿になれないことがわかりましたから。擦れるし揺れるし、透けそうだし。もう二度と体育の授業中に変身しませんように。

これを身につけた時、男として大切な何かを失ってしまいそうです。もうそんなものは、すでに失くしているかもしれないというのはきつと気のせいです。というか、所持しているのがバレた時点でその後の人生を失いそうです……

「あれ？ ヒメちゃん、ひよっとして今ノーブラ？」

はい、訳あってサイズ合うのを持ってないんですよ。チルは貸してくれないし。

プリンちゃんはやめると懇願したら、ヒメちゃんと呼ぶようになりましたよこの女。

「そりゃチルのは無理でしょ。どう見てもヒメちゃんの方がおつきいもん」

いやいや、リッコさんほど大きくはないですよ。

「それに、チルみたいにみみっちいサイズじゃ、小中学生のつけるような地味なのしかないって」

でもこんなに可愛いのだってありますよ。ただチルが、胸のふくらみもデザインも見た目も性格も地味っただけで。

「だよー。どうせブラつけるんなら、もっとこう寄せて上げるブラを」

二人揃って、寄せるものも上げるものもない女にブツ飛ばされました。

サイズだけ測ってもらい、無難なデザインのをワンセット購入。「ヒメちゃんヒメちゃん、絶対これ似合うって！」とクマパンを持って騒ぐリッコはとりあえずスルー。チルに至っては先ほどからため息ばかりついてます。コレ似合う？ と、服の上からブラをあててチルを見つめると、顔を赤らめてそっぽ向かれました。

せっかく購入したので、下着と服も着替えます。

や、やばい、スカート短すぎた！ スーナーするー！ ブ、ブラがあ、胸がムズムズするう！ 軽くパニックを起こしながら、どうにか気持ちを落ち着かせます。スカート姿を二人の前に披露すると、ボク以上にリッコが騒ぎやがりました。チルは開いた口が塞がらないといった感じ。

「ねえねえヒメちゃん、次はどこに行く？」

どうやらリッコに相当気に入られたようです。

いやいや、そろそろ活動限界時間が近づいていますので、おいとまさせていただきます。

「待って待って、Teacher番教えてよ。あ、一緒にプリクラ撮ろうよ」
携帯番号はまじカンベンしてください。まあ、プリクラくらいなら。

三人で歩いていると、すれ違った男性に声をかけられた。

「あ。お前ら」

三人で振り返ると、そこには見知った顔の男、ミツチイがいた。

「あれ、どうしたの？ 今日は一入？」
リッコが話しかける。

ボクは思わず、またチルの後ろに隠れてしまった。なんでこんな

ところで会うんだ?!

「いや……約束があつたんだけど、ぶつちされた」

……はい、そうですね、元々こっちと約束してたんです。そういえば、途中から携帯は諦めたように鳴り止んでました。

そして、ミツチイの視線はこちらへと向く。少しだけ緊張感が走り、背中に嫌な汗が流れるのを感じた。値踏みするようにボクを見つめると、怪訝そうに眉をひそめて口を開く。

「それで、その子は……?」

T o b e c o n t i n u e d . . .

第八話 - 第4回ぶりんちゃん放送局 -

……
「はい……え？ ホントに始めちゃうの？ ……え、入ってる？」

……
「ああ！ ……すみません。それでは、本日の放送を始めます。アシスタントのチルです」

……
「はい、メインの彼はというと、例によって例のごとく、突然奇声を発して放送室を飛び出して行ってしまいました。いつまで経っても帰ってきませんので、やむなくアタシ一人で始めることになってしまいました。正直言って、一人じゃかなりきついで、これを聞いていたらどうか早く帰ってきてください。というか、ピンチヒッターの方でもいいので、早く来て」

……
「はい、それでは本日の曲紹介へいきたいと思います。アイツ、こんなのいつの間に録ってたんだろうなあ……作詞・作曲・編曲・歌プリンちゃん♪『プリン王国国家、第一楽章』です。どうぞ」

ぶ、ぶ、ぶぶぶ、ぶりんぶりん ぶりんぶりん

ぶりんちゃ〜ん

遠い星からやってきたよ、ぶり（以下略）

「なんか最近、放送内容がカオスになりつつあるので、皆さんのまともな投稿を心よりお待ちしております。本当は、このまま第一楽章から第十三楽章までメドレーでお送りしようと思っていたのですが、一部の方……というより、うちの部長から苦情が入りまして、

ていうか放送内容にケチつけるなら本人出てこいよと、アタシは思
ったり思わなかったり」

ガララッ！

おまた〜！

「遅い！ ていうか、なんだその格好は?!」

「いやあ、着替えてたら意外に手間取っちゃって。」

「そんな制服、いったいどこから……」

制服汚しちゃいました〜って、ジャージ着て保健室行ったら、快
く貸してもらえましたよ？ 保険室の先生ありがとございました。
後日、クリーニングしてお返ししますね。

「どうどう？ 似合う？」

「いや、だから、リスナー見えてないから」

「何言ってるんですか、誰もリスナーになんて聞いてないじゃないで
すか。」

「どうどう、チルチル？ 似合う？」

「……」

「ヒドイ、何も言ってくれないなんて……」

「あ、いや、その……」

「……」

「に、似合ってるわよ……」

「キャ〜！」

「どうですか皆さん、聞きましたか!？」

「このチルのツンデレっぷり、神懸ってると思いませんか。」

「うっさい! ツンデレじゃない!」

「ねえねえ、一緒に写真撮ろ〜。」

「な、何すんのよ、ちよつと!」

「……」

「……」

パシャ！

はい、それでは本日の放送を……はい、始まっていますね。

今日もメインの彼は、そうですね、日本山系の奥地でクマと格闘しておりますので、ピンチヒッターにこのワタクシ、ヒーローはいつも遅れてやってくるでおなじみの、プリンちゃんでお送りしたいと思います。

それでは、本日の曲紹介を。

「終わった終わった」

……チル、あのさ、勝手にワタクシのネタを使われると、すぐ引き出しのストックが底をつ……はい、すみません、ワタクシが遅刻したせいですね。

それじゃあ、今日はどうします？

「どうしたもこうしたも、いつもアンタがまともにリスナーの投稿を紹介しないせいで、質問やリクエストのメールが山のように届いているんだけど」

みんな、ありがとお。

「皆さん、本当に聞いてください。お願いします。最近、こっちへの投稿ばかりが増えていて、メイン放送の方へのリクエストが減っています。どうか、メインの彼の方も構ってあげてください、切実にお願ひします」

そうですね。むこうの彼は、もうやりたくないっていじけてますよ。

「まあ、やりたがってないのは、最初からなんですけど」

む。そんなことはないですよ。彼は彼で、いかに放送を盛り上げるか日々血の滲むような努力を重ね……

「努力してるの？」

全然。

「だから、そういうことばかり言ってるから、同一人物説とかネタ

キャラ説が噂されてて」

はい、そうでした。

これまで、ワタクシは皆さんのいくつかの質問メールに答えてきました。ワタクシのプライバシーや私生活に関する質問には一切答えておりません。

なぜなら、ワタクシがワタクシのことを語っても、ちつともおもしろくないからです。

そのせいで、ワタクシの人物像が見えてこないということもあり、ニセモノだとか、本体はボイスチェンジャーだとか、実はオカマだとか、様々な憶測が飛び交っております。

「アタシはむしろ、アンタがそうなるよう仕向けてるとしか」
「そこで！」

本日は、チル以外にこの学校でワタクシのことをよく知る人物を、特別ゲストとして呼び出したいと思えます。

「……マジか」
マジですマジです。

というか、今から呼び出したいと思います。

この部屋の電話って使える？

え、内線しか使えない？ 外線は無理？ じゃあチル、ケイタイ貸して。

「……あの、まさか、ずっと携帯電話通して放送続けるつもり？
アタシのケイタイ料金が……」

部費で請求してください。はい、部長さんの苦情は聞きませんよ。

「プルルルル！」

お、かかりましたね。ちゃんと出てくれるかどうか。

「了承取ってるの？」

やだなあ、もちろん取ってませんよ。ゲストさんにも部長さんにも。

「ガチャ！ もしもし、どしたのチル？」

もしもし。リッコですか？

『あれ、チルじゃない……？ ひよつとして、ヒメちゃん？』
『そうです、おひさです。』

『や〜ん、お久しぶり！ なになにに、どしたの？』
『今日の放送、聞いてませんでしたか？』

『ごめん、聞いてなかった。今運動場の端っこで、みんなでお昼食
べてる。もしかして今日の放送、ヒメちゃん出るの？』

『出るもなにも、この会話ごと筒抜けですよ……って、聞いてませ
んね。』

『みんなー、今日ヒメちゃん出てるって。聞こえるところ移動しよ！』

『ああ、いいですよ！ この会話がそのまま流れてるだけな
んで。』

『はい、というわけで、本日は特別ゲストのリッコさんに、ワタク
シ達に代わって質問メールに答えて頂きたいと思います。』

『うそ！ マジで！？』
マジマジ。リッコよろしく。

ほらほら、チルもポカンとしてないで、早く投稿まわして。

『ヒメちゃん、それじゃあさ、このあと放送終わったらこっちおい
ですよ。お菓子あるよ。みんなもヒメちゃん見たいって』

『はい、時間+心の余裕がありましたら伺うことにします。
それでは、最初の質問です。』

『はい。プリンちゃんの外見的特徴を教えてください、っていう質
問なんですけど』

『可愛いです、以上。』

『……やっぱなんていうか、本人が言うところごく薄っぺらく聞こ
える』

『でしょう！』

『というわけでリッコ、お願いします。』

『了解。つまり、ヒメちゃんのスリーサイズを答え』

『違います！ 何をどう解釈すればそうなるんですか?! そんな
リアルに答えなくていいんです。』

『うんとねー、普通に可愛いと思うよ?』

皆さん、知ってますか? 女友達の言う『可愛い』ほど当てにならないものはないんですよ。男性諸君は注意してください。

『あ、ヒメちゃんとチルと、三人で一緒にプリクラ撮ったのあるよ』

『え〜、見たい見たい!』

『見せて見せて!』

……何やら、電話の向こうが騒がしいですね。

「あのさ、質問の内容はそんな抽象的な答えじゃなくて、もう少し身体的な特徴とかを聞きたいみたいなんだけど」

らしいです。リッコ、どうですか?

『身体的特徴? そうだねえ、身長はワタシやチルよりも10センチくらい低いかな。髪はショートだったけど、エクステ買ったよね。身体もどつちかっていうと小柄な感じ、軽そうだったかな?』

そんなに身長低くないです、それはリッコが高いヒール履いてただけで。

『いや、目線は低かった。髪のボリュームだけじゃ誤魔化されないわ』

そんなにチビじゃないですってば、しくしく。

『なんでそんなに落ち込んでんの。可愛くっていいじゃない。それに、十分胸だつてあるみたいだし』

まあ、チルよりは。

「……」

『ワタシほどはなかったけど、ヒメちゃんはチルより2カップも大

きい*カッ

わ〜っ!!

「きゃーっ!」

ガガッ!

……

ピ

……

……

リッコ、これは生放送です！ 編集はできませんので、余計なこととは言わないでください。

『なによ、別にいいじゃないこれくらい』

ダメです。これがバレると、いかにチルがズンドウ体型かということが。

「おだまり！」

はい、続いているメールです。

「続いてっていうか、続きというか。プリンちゃんの性格や好みはどうなの、っていう質問が多いんだけど」

性格は、こんな性格です。

「放送で話してるこのまんまです」

というか、自分で答えようがないじゃないですか。

リッコ、どうですか？

『うん、どうも何も、ワタシもそんなに長く話したわけじゃないから。むしろ、それはチルから見えてどうなの？』

「……ただのバカですね」

バカじゃない！

「バカです」

バカない！

『はいはい。んじゃ、好みってのはどうなのよ？ これは本人答えられるでしょ？』

そうですね、好きなものはババロアです。嫌いなものは、チルの手りよ

「それは前に答えたでしょ！」

『じゃあ、好きなタイプは？』

……チルみたいないじりがいのある、ツンデレっ子ですね。

「ツンデレじゃない！」

ツンデレです。

「ツンデレない！」

『……なんかさ、アンタ達、羨ましくなるくらい仲いいよね』

「というか、すみませんねえ、特別ゲストに軌道修正任せちゃって。うう、すみません」

「それでは、次の質問メールへ。」

『それよりさ、ヒメちゃん』

「はいはい。」

『なんか、さっき放送の中で写真撮ったんだって？』

「はい、撮りましたよ。」

『その写メ送ってよ。それか、放送部のHPにアップしてよ。みんな見たいって』

「ヤです、秘密です、二人の思い出は宝石箱に入れてそのままお墓まで持っていきます。」

「投稿ボックスにも、その写真が見たいとか、プリクラがほしいっていうメールがいっぱい届いてるんだけど」

「むう、まあプリクラくらいなら。」

「リッコ、ほしって言うてる方にあげてやってください。」

『ヤダ。なんでワタシなのよ。時間なかったし、三人で分けてるから少ないもん』

「仕方ないですね。」

「それでは、ワタクシの持ってる一枚をリスナープレゼントということ。」

「チル、ほしって書いてるメール、どれくらい来てるの？」

「うん、たぶんこの辺の投稿はそうだと思う」

「わあ、けっこう多くきてますねえ。」

「はい、というわけで、プレゼントの応募はすでに締め切りました。現在投稿ボックスに届いているものの中から抽選したいと思います。みなさん、今から応募しても手遅れですよ。」

「チル、どうやって抽選する？」

「そうね……リッコ、好きな二桁の数字言ってみて」

『56!』

「はい、じゃあ投稿メールアドレス番号の下二桁が56の人にプレゼントします」

『ちなみに、それはヒメちゃんのウエスト
ぎゃー……!』

なんでリッコがそれを知ってんの!?

『だから、あの時店員さんと一緒に話してたじゃない』

「グ、グラビアアイドル並み………ていうか、当たったメールつてこれなんだけど」

はいはい、当選番号**（チヨメチヨメ）の幸運な方は、2年A組のミツ……

「……」

……

『え、なにになに?』

……チル、個人的にこの人には送らなくていいと思う。というか送りたくない。

「同感」

というわけで、今回のリスナープレゼントは次回へ持ち越します。次回の放送時に読まれた最もおもしろかった投稿者に差し上げますので、ふるってネタを投稿してください。

『え〜! 今回決めないの? 次はね、ヒメちゃんのヒップサイズの
の
』

シャラ〜ップ!

黙りなさい! ゲストといえど、勝手なマネは許しませんよ。

これ以上に、チルの落ち込む顔は見たくないです。

「うっさい!」

はい、というわけで時間もおしておりますので、今日の放送はここまでです。

特別ゲストのリッコさん、本日はどうもありがとうございました。

『ほいほい!』

また最後になりましたが、いつものようにこの放送に関する質問・リクエストは掲示板への書き込みなどで受けつけていますので、どうかよろしくお願いします。

本日の放送は、パーソナリティを務めさせていただきましたプリンちゃんと、ツンデレの

「ツンデレじゃない！ チルでした」

ねえチル、気づいてる？ チルがツンデレじゃないツンデレじゃないって言う度に、加速度的にツンデレ属性が上

ピ　ブチン！

第九話 - 第EX1回通常放送回 -

こんにちは！

「じ、こんにちは……」

「ごらあ！ もっとキリキリ喋らんかい！ そんな声で、リスナーに熱い思いが伝わると思ってたのか!？」

「オマエいつも情熱なんて伝えてないだろ。わ、わかったから、足蹴んなつての」

はい。皆さん、こんにちは！

「こんにちは！」

それでは、本日の放送を始めたいと思います。メインパーソナリティはもちろん、どうもボクです。

そして、こちらは下僕の

「下僕じゃねーよ。……いえ、はい、オレは下僕です、下僕のミッシェルです」

はい。本日はこの二人で放送を行っていきますので、どうかよろしく願います。

ああ！ 皆さん、いくらプリンちゃんもチルも出てないからといって、音量下げたり放送切ったり、投稿ボックスを荒らしたりしないように。

なぜ今日はチルがいないかというと、そうですね、自分で作った料理に当たって寝込んでいるということと。

「ただの風邪だろ」

はい。将来的にパンデミックが予想されるであろう新型インフルエンザのプリン型ですね。ボクも先月重い病気にかかりまして、夢と現実とトイレの間を行ったり来たり。

「ただの食いすぎだろ」

いいえ、違います。

飲みすぎです。

「……………抹茶ミルク」

あああ、やめてください！ まだトラウマが残っていますので、傷口を抉らないでください。

はい。そんなわけで、チルがお休みしていますので、代わりにこの下僕を連れてきた次第です。

え、ピンチヒッターはプリンちゃんじゃないのかって？ 違います、そう都合よく出てくれるはずがないじゃないですか。出るかどうかどうしても知りたければ、お近くのプリン星大臣の方までお問い合わせください。

「それで、なんでオレなんだろうな」
うるさい黙れ。

借金のかたに売られた分際で、文句言うとは何事ですか。借金分はしっかり働いてもらいますよ。

もっとも、この放送の出演では、利子分にもなりませんけど。

「おい、ちよつと待て！ それは聞いてないぞ、出演料分くらいは減らしてやると」

ボクの出演料はタダです！

「……………」

……………

「……………」

……………はい、文句があるなら部長さんまでお願いします。というか、放送部員でもない我々二人がなんでこんなことしてるんでしょうね？

「だな……………」

貴重なお昼休み削って働いてんですから、メシくらい奢ってくれたっていいじゃないですか。

「当然だな」

……………出前でも取りますか。

「よしきた」

もちろん部費で。はい、部長さんの苦情は聞きませんよ。文句が

あるなら投稿ボックスへ。先生方は、文句があるなら毎日出前取
てる理科準備室の先生までお願いします。あ、ミッチィ、ボクはい
つものチャーシュー麺ネギ少なめ麺固めで。

それでは、出前が届くまでの間、暇つぶし程度に放送を続けてい
きますので、皆様どうかよろしくお願いします。

今日はチルがいまないのでボケとツツコミにキレがないかもしれ
ませんがご了承ください。まあ、ダブルボケもそれはそれで一つの
漫才のカタチとして定着してきてますのでアリかなと。

「オマエとコンビ組む気はねーよ」

やだなあ、すでに二人でワンセットとして扱われてるじゃないで
すか。ミッチィが何かやらかすと二人揃って職員室、ボクは全く関
係ないのに二人揃って生徒指導室、風邪で休んでいたというアリバ
イがあるうと二人揃って校長室。

「その呼び出しの半分以上は、オマエの責任だけだな」

はい、というわけで今回は相方がミッチィなのですが、これでは
いじるネタがありません。現在投稿ボックスに送られてきている投
稿は、そのほとんどがチルをいじるネタなので今回は使用すること
ができないんですよ。

チルがいないので言います、皆さんグッジョブです。

さて。

では、本日はどうしましょうか？

「オレに聞くな」

電話でチルを呼び出しますか？

「そこは寝かせてやれよ」

さすがに自宅療養中の病人を呼び出すのは心苦しいです。

というわけで、本日はチルの身代わりにミッチィがいじられ役と
なりますので、皆さんからの投稿をお待ちしております。

「そういうポジションなのかよ！」

はっはっは、今更気づいたんですか。

それでは、皆さんがミッチィへの怨みつらみを書いている間に、

一つメールを紹介したいと思います。まあ、今回この投稿があったから、無理矢理ゲストに引つ張つてきたんですけど。

2年A組の匿名希望のRさんからの投稿です。

『パーソナリティのお二方、リスナーの皆さん、はじめまして。私はつい先日、非常にたいへんな事件に遭遇してしまいましたので、思わず筆をとった次第であります。これは以前から噂されていたことなのですが、根も葉もない話と全く信じておりませんでした。しかし、私はあの日、衝撃の現場を目撃してしまったのです。なんと今学校で噂の女の子、プリンちゃんも男の子と一緒に歩いているではありませんか。その相手というのが、また私達のよく知る人物、なんとミツチイだったのです!』

「ちよつと待て! マジで待て! それはいろいろおかしいぞ! そもそも、それをなんでリッコのやつ投稿なんてして」

「黙りなさい! 今は投稿を読んでいる途中です、それについての弁論は後でじっくり聞かせて頂きます。」

『私は我が目を疑いました。私自身はあまり彼女のことをよく知らないのですが、一緒にいた彼女をよく知る友人Tは間違いなく本人であると断定しました。茫然自失とする私達の前を、二人は仲良く並んで映画館の中へと入つていったのです。ひよつとしたら腕ぐらい組んでいたかもしれませぬ。思わず写真に撮りましたので同封いたします。プリンちゃん本人に聞くのはあまりに恐ろしいので、是非とも彼女がいないところでミツチイを問いただして頂きたいです』
という投稿でしたので、写真を先ほど部長さんとHPのトップにアップしておきました。皆さんご確認ください。

「お前ら全員グルかよ! てか、いつも写真あげないクセになんてこついう時だけ」

被告人、内容に相違ありませんね?

「……」

肯定!

判決、さらし首!

「すでにさらしてんじゃねーか！」

はい、というわけで、これをふまえて皆さんからの投稿をお待ちしております。

それでは本日の曲紹介を

）

皆さん、たいへん悲しいお知らせがあります。

皆さんからのHPへのアクセスが殺到しましたので、サーバーがダウンしております。情報の先生から苦情が入ってきておりますので、もう少し時間が経ってから繋ぎ直してください。

なので、このわずかな時間の間に届いたいくつかの質問メールに答えていきたいと思えます。もとい、答えさせます。

「だから、あれはたまたまチケットが余ってただけで。そもそも、お前がドタキャンしやがったせいじゃねーか。だいいち、ヒメちゃんはそのままでリッコ達と一緒にいて……」

そんなのは全く関係ないです。重要なのは、ミッチイがプリンちゃんと一緒にいたという事実のみ。

届いているメールの大半はミッチイへの果たし状だったり闇討ち宣言だったりしますが、一部野次馬根性丸出しの質問メールがありますので、適当に見繕って質問していききたいと思います。ミッチイ、登下校時には十分注意してください。

「人事だと思いやがって……」

はい、人事ですよ。ちなみに、ボクもミッチイもしばらく前からケイタイの電源を切っておりますので、いくらメールを送ってもムダです。

それでは、一つめ。ストレートな質問です。

『ミッチイは、本当にプリンちゃんと付き合っているのですか？』

「付き合っていない！」

即答です。これは、用意されていた答えですね。では、次に

「待て！ オマエの解説がいちいち」

『付き合い始めてどれくらいですか？』

「だから、付き合い合ってるねーって言うてるだろ！」

往生際が悪いですねえ。リスナーは誰もそんな回答は望んでいないですよ。

それで、いつからの付き合いなんですか？

「違う！ あの日初めて会っただけで、それ以来一度も会ってない！」

ほほう。初めて会った日に、一緒に映画を見に行くほどの仲になったんですね。

「だから、それはたまたま映画のペアチケットが余っただけで。

あの日は、ヒメちゃんと映画見ただけで、他は何もねーよ！」

別れ際にキスとか。

「ねーよ！」

腕組んで歩いたり、ハグしたり。

「ねーよ！ まだ手も繋いでねーよ！」

ということは、いずれはそういう関係になりたい、と？

「……」

……

「……」

出ました！ 皆さん、犯人はクロです！

プリンちゃんファンクラブ（非公式）の親衛隊の皆さん、制裁を

お願いします。

「待て待て！ これは誘導尋問だろ！？ 別に妄想するくらい個人

の勝手に、そもそもお前らだってそれくらい」

はい、続いての質問です。

『出会いのきっかけは何ですか？』

姿を見せないと噂の彼女、どうやって出会うのか、それが分からなければ同じスタートラインに立つことすらできない。ミッチィへ

の嫉妬は、つまりそういうことです。ミツチイ、どうですか？

「街彷徨ってたら、たまたまRやTと一緒にいるところに遭遇した、以上」

使えない男ですねえ。だから、だれもそんな使えない情報を望んでは……

「本当なんだから、しょーがねーだろ！　そもそもTやRと一緒にいなければ判別つかねーよ、オレは顔だって知らなかったんだから」ということらしいです。皆さん、鵜呑みにして街をゾンビのように徘徊しないように。

「てか、Tやオマエの周りを徘徊した方が、遭遇確率高そうなんだけどな」

……なんで、そこでボクの名前が出てくるんですか？

「だって、本人に聞いたもんよ。オマエとヒメちゃんは」

わあああ！！　ああああー！！

（それはトツプシークレット！　彼女の身元詮索は止してください、チクリますよ？）

（「わ、わかった……」）

ということ、唯一の仲介人はT氏ということ。

「今いない病人に丸投げすんなよ」

続いての質問です。

『プリンちゃんの第一印象は？』

「そうだな……小学生みたいなチビで騒がしい女」

つ、次の質問は、

『一緒に話してみて、どんな感じの子でしたか？』

「ムカつく変な電波女」

……親衛隊の皆さん、ミツチイに制裁をお願いします。

「待て待て！　なんでそうなる？！　オレはただ単に、オレ的に素直な感想を述べただけで」

キミは今、数多くの敵を量産していますよ。そのことをよく理解した上で、次の質問に答えてください。

『彼女のどこに惹かれましたか？』

「……………」

この裁判に、被告の黙秘権は認められていません。もう一度聞きます、

『彼女のどこに惹かれましたか？』

「……………む、胸が意外にでかかったとこ」

……………」

「……………」

……………判決、死刑！

キミはそんなとこばかり見てたんですか！

「ちよ、ちよっと待て！ 違う！ んなこと、素直に答えられるかよー！」

今のキミの発言からは、彼女は胸がでかいけど電波で変な女という、最悪の印象しか残らないと

「だから、こんな場所で素直に言えるわけねーだろ！」

はい。残念ながら、この学校での放送は、毎回ボクやチルを通して、録音したバックナンバーを彼女に送り届けているという。

「んなこと知るかよ！ てか、バックナンバーあるなら、HPにあげろよな！」

ダメです。そんなことしたら、放送部の貴重な収入源がなくなってしまうじゃないですか。

知ってますか？ プリンちゃんの出演放送回はかなりの高値で。

「売るなよ！」

あ、すみませ〜ん部長さん、これシークレットでしたか？

それならそうと、ちゃんと口止め料を払っていただかないと。

「オマエ……………」

はい、というわけでミツチィ。

「んだよ……………」

今までの発言は、ツンデレということで大目に見てあげますから、もう一度だけチャンスをあげます。いいですか。よく考えて、今

後のことも考えて、質問に答えてください。いいですか？

「……………」

『彼女のどこに惹かれましたか？』

「……………」

……………」

「……………」な、生意気そうな目が、似てたから……………」

……………」は？

「い、いや、だから……………」小悪魔みたいなんだけど、そのわがままに付き合わされるのも案外悪くないっていうか……………」

……………」ただの、DMですね。

「違う！ そうじゃない！ そうじゃなくって、ただのム力つく女かと思ったら意外に可愛い性格してて、思ってたヤツにそっくりでっつてオレは何を言っただああああ！！」

……………」何を言っただですか。

「や、やめる！ そんな蔑んだ目でオレを見るなあ！」

……………」ただの変態ですね。

「うわああああ！！」

……………」

……………」はい、被告が自分の発言に耐え切れず床をのたうち回っておりますので、本日の裁判はこれにて閉廷とさせていただきます。

皆さんご静聴ありがとうございました。

また最後になりましたが、いつものようにこの放送に関するご質問やご意見・ご感想は、掲示板への書き込みなどで受け付けておりますので、どうかよろしくお願いします。

それでは、パーソナリティを務めさせていただきましたボクと、

「うわああ〜あああ〜！」

被告人、2年A組の（ド）Mくんでした。

さて、では出前のラーメンを。

え、生徒指導室に届いてる？ では、のびないうちに

ピ
ブチン！

第十話 ・ ミッチイとヒメちゃんの日常 ・

彼女の第一印象は、ちつさくて騒がしい女、それに尽きる。

しかし、騒がしいと感じたのは、学校での放送をよく聞いていたせいかもしれない、その高い声が印象的だったからかもしれない。この日の彼女は、それほど口数が多い方ではなかったように思う。

服装もあつて、彼女は幼く見えた。小学生だと言われても疑いなく信じてしまいそうだが、実年齢はおそらく自分やチルと同じくらい。その小柄で華奢な見た目に反して、目つきは鋭かった。彼女の生意気そうな表情に、どこか既視感を覚える。

その彼女は、チルの陰に隠れて、二人で何かを話している。そんなチル達を横目に、リッコがこちらに話しかけてきた。

「ミッチイも、今日は買い物？」

いや、まあ……そんなところ。言葉を濁して答えた。

「一人なの？ いつもの相方が見当たらないようだけど」

相方言うな、アレはチルの相方だろ。

「うん、ワタシもそう思ってたんだけど、今日一緒にいたら、なんかヒメちゃんの方がチルの相方っぽい感じがした。あ、でも、二人は愛人関係だって言ってるから、本妻はやっぱりアツチなのかな」

何の話だよ。

いつものようにアイツと約束をしていて、すっぱかされたこと告げる。

「ふーん。まあ、最近のアイツって、なんか付き合い悪いしね」

授業中とかに体調悪そうにしているのと、何か関係があるのだろうか。

「二人でどこ行くつもりだったの？」

ん、いや、適当に店まわるなり、あと映画に行くつもりで。

期限切れ間近の映画のペアチケットがあり、誘う相手もないので仕方なくヤツを……

「男二人で？ それは残念すぎるわね」
言うな！

話題を誤魔化すように、今度は視線をチル達の方に向けてリッコに尋ねた。

それで、あの子はいったい……？

オレとリッコの視線に気付いたのか、チルに押されるように彼女はあおおすと前に進み出てきた。

「そうそう。この子がいつもチルと一緒に放送やってる、ヒメちゃんだよ」

ヒメちゃん？

こちらを向くと、小さく会釈して一言だけ呟いた。

「よろしく」

自己紹介、終了。

終わりがよ。

こちらが自己紹介すると、彼女は迷いなく「プリンちゃんです」と答えやがった。もうそれ以上話す気はなさそうだったが、こちらには聞きたいことが山ほどある。

キミ、うちの学校の生徒？

「たぶん」

同い年？

「おそろく」

どこか彼女の挙動に不思議なものを感じた。

最初はチルの陰に隠れていて、人見知りの激しい性格なのかと思っただ、それとは決定的に何かが違う。よく考えてみれば、校内放送であれだけ好き放題喋れる女なのだ、こんなに大人しい性格なはずがない。決して合わせようとしなないその視線は、怖がっているとよりも戸惑っているようにも感じる。

チルとは仲がいいのか？ 長い付き合いだが、こんな友人がいる

と聞いたのはつい最近のこと。

「そこそこ」

幼馴染か何かか？

「いいえ、愛人です」

「違う！」

真顔で言う彼女に、隣からチルの見事なツツコミが入った。

本当にうちの学校の生徒なのだろうか。全く見覚えも、噂を聞いたこともない。リッコに尋ねてみても「さあ？」と肩をすくめただけ。

キミの本名は？

「秘密」

なんでうちの校内放送に出てるんだ？

「大臣に呼ばれたから」

本当は、いったいどこの学校の生徒なんだ？

「プリン王国都立第一プリン高等学校」

ようやく気がついた。

この女、言葉が少ないのは話せないのではなく、人見知りがあるのではなく、ただ単に真面目に答える気がないだけなのだ。

カチンときた。

むこうには気はなくとも、こちらに用はある。

キミ、オレとどこかで会ったことないか？

表情の変化は見逃さなかった。ピクリと、ほんの少しだけ彼女は眉を動かした。

「いいえ、はじめてですよ」

初めてオレと目を合わせて、ニコリと微笑んで答えた。確信した。

間違いない。コイツは、オレのことを知っている。

どこで会っているのかは、全く身に覚えがなかった。

「なになに、ヒメちゃんを口説いてるの？」

ちげーよ。空気読めない発言をするリッコ、オマエにはオレとコ

イツの間に一瞬だけ散った火花が見えていないのか。ちなみに、リツコは空気を讀んだ上で煽る様な発言をするので、なお夕チが悪い。「アイツにドタキャンされて、ペアチケット余ってるんでしょ？」それは事実。もつとも、このペアチケットも貰い物の招待券なのでオレの懐は全然痛くも痒くもない。リツコ達が二人でいるなら安く売りつけるのも手だが、三人では買ってくれないだろう。

「なら、アンタが行ってあげれば？」

事も無げにチルが言う。リツコも驚いたような顔をする。

差し出された当の本人は、ギョツとしたようにチルへ、貴様何考えてんだ正気が頭腐ってんじゃねーかこのやろうと抗議の視線を送っている。

チルは本気で空気読めない発言するので、なお夕チが悪い。

「だって、それはもともとアンタが」

ヒソヒソ、ヒソヒソ……。また二人で内緒話。どうやら、チルもこの子に何やら恨みがあるらしい。

それに対して、オレは。

それは嬉しいな、良かったら一緒に行きませんか？

紳士な笑みで誘ってやった。

驚いて表情の固まる彼女。

コイツには、まだ聞ききたいことがある。

おかしな女だった。

電波な発言ばかりする女かと思いきや、別にそういうわけでもない。普通に聞けば答えてくれるし、軽い冗談を交えれば普通に笑ってくれる。あのおかしな言動は、チルという相棒がいて初めて成立するものらしい。

「誘ってくれたのは嬉しいけど、今日ワタシ、この後ちょっと用事があるから、途中で抜けることになるかも」

構わないよ。もともとチケットも貰い物だから。

映画館に着くと、まず目的の映画の時間を確認する。次の上映ま

では、まだ時間があるようだ。時計を指して大丈夫？と聞くと、彼女は「たぶん」と曖昧に頷いた。

見たくもない映画につき合わせちゃって、悪いね。

「ううん、ワタシもちょうど見たかったところだから」

そもそも、この映画を見たがっていたのは、オレではなくアイツの方なのだ。その本人がばっくれやがって。

と、その瞬間、ある恐るべきことに気がついた。

気づいてしまった。

髪型と服装、パツと見た印象があまりに違うせいで今の今まで気づかなかった。

何気なく見た彼女の横顔が、雰囲気、口調が、今日来るはずだったアイツにあまりに酷似していた。

嫌な汗が流れる。オレの内心の動揺に、彼女は気づいていない。

ばれないよう緊張を押し隠して、何気ない様子でオレは彼女に聞いた。

ひょっとして、アイツの身内か？

彼女はピクリと反応を見せた。

まるで、ヤツを女装させるとこうなるというマネキンモデルのよう。だが、決してヤツ本人ではない。その印象的な高い声と、男の視線を集める胸元の膨らみは、スカートからのぞく足は、彼女の女としての性を強調する。動揺したのは、ヤツ本人かと思ってしまうことではない。

存在しないはずの女の子が、存在してしまったということ。

「うん……実は、いとこ同士なの」

迷ったように、彼女は答えた。

まるで瓜二つ。従兄弟というだけで、これほど似るものなのだろうか。二卵性の双子でも、ここまでそっくりになることはないように思う。

触れてはいけない話題だと感じた。それ以上追求することはしない。

とりあえず、お茶にでもしよう。

彼女を促して、近くのカフェに入った。

プリンちゃんは、コーヒーにする？ それとも紅茶？

「……あのね、ミツチくん。恥ずかしいから、お願いだから、プリンちゃんって呼ばないで」

自分で名乗ったくせに。

じゃあ、名前教えるよ。

「それはヤダ」

それなら、ミルクプリンちゃー

「ごめん、ワタシが悪かった。カンベンしてください」

だったら、本名名乗れよ。

「それはダメ」

わがままなお姫様だ。

なら、オレはいつたいなんて呼べばいいんだ？

「……ヒメちゃんでもいいよ」

わけが分からん。

やっぱり変な女だ。

オレの方はミツチイでいい、あだ名にクン付けはいらん。それで、

ヒメちゃんはコーヒー？ 紅茶？

変人でも狂人でも電波でも、これでも女は女。

「紅茶かな」

わかった。オレが買ってくから、ヒメちゃんは先に席を取っててくれ。

「ありがとう」

彼女を見送って、残されたオレは一人苦笑した。

変な会話ではあるが、オレは間違いなくそれを楽しんでいる。この程度のががまま、ふりまわされるのは慣れている。彼女が名乗れないのには何か理由がありそうだ。誘ったのはこちらの方なのだ、甘いお菓子でも付けて、お姫様の機嫌を取っておくのも悪くない。

レジ待ちの間に、ケイタイでメールをうった。今日の約束をばっ

くれやがった、今どこで何をしてるか分からないアイツに。

『食券5枚』

オーダー待ちの間に、すぐに返事は送られてきた。あれだけ電話をかけても、全く出ようともしなかったのに。

『ふざけんな!』

いやいや、ふざけんなはこっちのセリフだろ。

と、ふと思いついた。

あの時、約束の時間に電話をかけた時、ヤツのケイタイに出たのは彼女の声ではなかったか？

確信はない。確証もない。あの時、電話の電波状況も悪かったし、映画の時間も迫っていて慌てていたのでオレの手違いという可能性もある。

やはり彼女は何か重大なことを隠しているような気がする。

お茶とスイーツセットを持って、彼女の元へ。

お待たせ。今日付き合ってくれたお礼。

「ありがとう」

彼女はニツコリと微笑んだ。

……なんか機嫌が悪くなっているような気がするの、気のせいかな？

性格がつかめない女。

ここで彼女の機嫌に気づいたなら何か気の利いたセリフでも語ればいいのだろうけど、そこまでキザでもないし女の扱いに慣れていくわけでもない。何より、何を言えばこの女の機嫌がよくなるのか知る由もない。

彼女は一つため息をつく、気を取り直してスプーンを手にとった。

そして、その手が止まる。

「……これは、何？」

目の前に盛られたスイーツを見て、彼女の目が点になる。

ん、何って、本日のスペシャルなんかスイーツ。量的にもちよ

うど良さそうだったし、目についたからと適当に選んだ。彼女の好みなんて知る由もない。

「真ん中のこれって……」

どう見てもプリンだ。

いや、だから、キミがプリンプリン言うから。

大きいお皿の割に盛られている量は比較的少ない。中央に据えられた極上の抹茶プリンの周囲を彩るのは、最高級の小豆とホイップクリームなどなど、それらの上から零れるような練乳ミルクがわずかに鈍く輝く。

その赤いのは梅干を漬け込んだものらしいぞ。

「キミってやつは……」

言葉もないらしい。

ちなみに、プリンを選んでやったのは意図的にだが、抹茶だったのは偶然だ。

「……ワタシ、本当はプリン嫌いなんですよね」

うそつけ。パクパク食ってんじゃねーか。

「好きだったものなのに、嫌でも食べなくちゃいけないこの苦痛、キミに分かる？ あんなにおいしかったのに、どんどん嫌いになっていくこの現実。下手に安いミルクプリンが好きだって口走ったがために、大量に届けられたプリンの山が夢にまで現れて襲って」「食いすぎだろ。」

「好きなものだから、残せないんじゃないですか！ 生モノは、足が早いんですよ?!」

その割には、お皿のものはきれいに食べつくしている。

日が保つものに、設定変えればいいじゃねーか。

「設定じゃないです。それに、ワタシは最初からババロアが好きだって」

生モノじゃねーか。

学校での人気は相当なものだが、それはそれで苦勞があるらしい。よくここまで正体がバレずにいられるものだ。

もつと他の、無難な食べ物にすればいいんじゃないか。チョコレートとかクッキーとか。

「……チルとか？」

首を傾げながら答えた。生モノなうえに、それは生々し過ぎるから止めとけ。

チルとヒメちゃん、二人の様子を見ていれば分かる。この子は、チルをいじるのが好きなのであってそれ以上でもそれ以下ない。しかし、それがガチな連中を呼び寄せ、男共の飽くなき精神をかき立て揺さぶり続けるので危険なことこの上ない。

少なくともお昼の校内放送で扱うネタじゃねーよ。

「じゃあ、チルをいじるのは止めると？」

そうじゃない。下手なことを繰り返し強調するなってことだよ。

一つ一つのネタを軽く流していけば、聞いている方もネタとして聞き流してくれる。

「ガチでラブレターまでもらったけど？」

そういう空気読めないやつ、もしくは本気のバカは、さらして吊るし首にするしかない。

「ガチで、チル宛に果たし状まで送られてきたけど？」

……マジか。

「マジマジ。なんかね、前に新しいメイドの募集を言ったことがあったんだけど、ワタシの方が相応しいですって、メイド姿の写真まで付けて」

さらせさらせ。

「ワタシの方が胸が大きいって、胸チラ写真までセットだった」

オレによこせ。

「それはダメ。というか、そんな関係の投稿は、全部チルが燃やしてた」

そんなに送られてきてんのかよ。

「ホントに下品なネタ投稿も多いんですよ。ワタシとチルが絡み合ってるエロい小説が送られてきたり、プリンに白っぽい何か（練

乳)がぶっかけられてる写真が送られてきたり。写真は見えませんが使えないって言うてるのに」

あれだけ下ネタ連発しといて、何を今更。

「みんな、ワタシの存在をいつたい何だと思ってるんでしょうね。こんな普通の女の子なのに」

普通かどうかはともかく。

「ひどい」

生徒の半分くらいが、存在自体がネタだと思ってるぞ。オレも、今日こうやって会うまで存在を疑ってたからな。写真とかを放送部のHPにアップすればいいんじゃないか。アイツのいところだってこと説明すれば、みんな理解してくれる。

今の彼女は、噂や都市伝説みたいなものだ。噂や声は聞こえてくるのに、実態が何も存在しない。一番よく知っているはずのチルでさえ、何やらその扱いに困っている様子。

「やだなあ、曖昧だからこそおもしろいんじゃないですか。自分の同級生と知って、隣で一緒に勉強しているクラスメートの子だと知って、こんな下ネタ送れますか？」

よく分かってんじゃないか。

……あれ？

んじゃ、やっぱりうちの学校の生徒なのか？

「それは秘密」

また笑顔で誤魔化された。

どれだけ聞いても、何気なく話題をふっても、肝心なことは何一つ答えてくれない。

実態のないお姫様、仮の姿のプリンセス、確かに存在しているのにまるでどこにもいなかったような、性格でさえよく分からない掴みどころのない女の子。

正体を探るのは、すでに諦めている。

しかし、これだけは譲れない。

ねえ、映画館に入る前に、メアドだけ教えてよ。

オレのケイタイの電話番号とメアドをメモった紙を手渡した。

「いいよ」

驚くほど素直に頷いた。

席を立つ直前に手渡された彼女のメモ書き、店を出る時にちらりとそのメアドを確認すると、やはりそれは放送の投稿ボックスのアドレスだった。

先ほどまでお茶を飲んでいたので、飲み物もポップコーンも買わずに館内へと向かう。

この後の用事は、時間は大丈夫か？

「うん、たぶん。最後まで見ればいいけど」

そう答えるが、その目は何かを確信している。

きつと彼女は、映画が終わる頃には消えてしまっているんじゃないか。そんな予感がした。

時間を気にしている割に、彼女は腕時計を持っていない。用事というのも時間が曖昧なことから、ケイタイにでも連絡が来るのだからうけど、ケイタイを確認している姿を一度も見ることがない。

それでも、時間は近づいている。

休日ということもあり、映画館には人が多かった。シートも半分くらいが埋まっている。指定された席は端の方、スクリーンは少し見にくいが、彼女のためにはちょうど良いのかもしれない。

「ワタシ、映画館まで見に来るのって久しぶりなんだ」

今日来るはずだったアイツも同じようなことを言っていたの思い出した。

それなら、もっと時間に余裕がある時に誘えばよかったか？

「おごってもらえるんだから、こんなに贅沢なことはないよ」

久しぶりの映画で、話のタネにはなるか？

「ミツチイと一緒に見れたことが、ね」

……学校の放送で言うんじゃないぞ。

「さあ、どうかな？」

彼女は笑みを浮かべる。

それを見て、オレがよっぽど嫌そうな顔をしていたのか、プツと小さく吹きだして笑うと「たぶんワタシから言うことはないよ」と言った。どこまで信用できるものか。

どうしても聞いておきたいことがあった。

ヒメちゃんは、どうしてあの時……

次の言葉を言いかけて、館内に上映のブザーが鳴り響いた。照明の明かりが落とされ、辺りが静まり返っていく。

「始まるみたい。最初は他の映画の宣伝ばかりだけど」
そうだね。

暗がりの間に少しだけ見えた、彼女の自然な笑顔。

言いかけた言葉を飲み込んだ。

結局、聞くことはできなかった。

聞こうと思えばいくらでも聞いた。タイミングはあった。きっと彼女なら、何も迷うことなくウソかホントかよくわからない答えを笑って返してくれるだろう。別に意識する必要なんて、どこにもなかったはず。

聞くことができなかったのは、その答えを知ってしまったのが嫌だったから。オレ自身が、彼女の気持ちを知るのが恐かったから。彼女とのささやかな時間を壊したくなかったから。

あの放送での、言葉の真意はいつたいどこにあるのか。

映画も終盤に差し掛かった頃、隣に座る彼女はゆっくりと立ち上がった。

タイムリミット。

席から離れる直前、彼女はチラリとこちらを見ていた。彼女の顔はスクリーンからの光の影になっていて見ることはできない。おそらくこちらの顔は見えているだろう、曖昧な笑みを浮かべることができなかった。

彼女は去った。

誰もいない隣のシートが、ひどく寂しく感じた。

映画の内容なんて頭に入っていない。

ひよつとしたらトイレに立つただけで、またすぐに戻ってくるんじゃないか、そんな淡い期待が頭をよぎる。

望みを託しながら、そんな希望はないと気づいていながら、それでもオレは彼女を待っていた。

どれだけ待っただろうか。

映画は終盤、最後の盛り上がりを見せていた。お客達は息をひそめてヒーロー、ヒロイン達のハッピーエンドを願う。だが、そんな映画のクライマックスさえ凌ぐ、驚きの出来事があった。

小さな動く人影に、視線は釘付けとなった。

彼女は戻ってきた。

期待していたはずなのに、目を疑うほどに驚いた。こちらの様子を見ることもなく、彼女は静かにシートに着く。その横顔から感情を窺い知ることができない。

しかし、彼女の様子は映画の上映前と少しだけ変わっていた。

映画が終わった後、オレ達は並んで静かに歩いた。周りには興奮したように映画の感想を言い合うお客達がいる。話のネタがないのではない。オレはどうか覚えていた話の本筋を、彼女がいなかったところを補足するように説明する。彼女は小さく頷くだけ。先ほどまでと変わらない笑みを浮かべているようだが、その表情にはどこか陰りが見えた。

駅まで送ると言うと、彼女はまたニコツと微笑んだ。

夕方の駅前には人通りが多い。家路を急ぐ人。両手いっぱい荷物を抱え友人達と笑いながら歩く人。まだまだ休日は終わらないと腕を組んで駅とは違う方向へと向かう恋人達。

駅から少し離れたところで別れることにした。どこへ向かうのを知られるのも、彼女は嫌いそうだったから。

立ち止まると、彼女は何かを待つようにこちらを振り返った。

今日は付き合ってくれてありがとう、楽しかったよ。

素直にお礼を告げた。

もう少し気の利いた言葉が言えなかったのか、もうこれで別れてしまつていいのか、本当に最後に聞かなくてよかったのか。様々な惜しむ感情と後悔の念が渦巻く。

しかし。

彼女は小さく頭を下げると、何も言わずに、また駅に向かつて歩き出した。

それを見つめながら、オレは携帯電話を取り出した。

「ヒメちゃん！」

呼びかけると、彼女は振り返った。

パシャ！

彼女の写真を撮った。ケイタイの画面には戸惑うように微笑む彼女の姿が映し出されている。不意打ちで写真を撮られたこともあり、彼女は怒ったような、それでいて少し恥ずかしいような顔をして俯いた。

「最後に、キミの本当の名前を、教えてくれないか？」

本気で問いかけた。

今までにないくらい真面目な表情で聞いた。

焦ったように口を開きかけた彼女は、オレの顔を見て、視線を泳がせてまた口を閉ざす。

彼女の返事を待った。いつまで経っても、彼女は決して目を合わせてはくれない。何か言葉を迷っているかのように、喋りたいのに言葉を失ってしまったまるで人魚姫のように、彼女は一言も声を出すことはなかった。

ただ無言でこちらを指差した。

オレの持っている携帯電話を指した。

そして、クルリと背を向けると、さよならと小さく手を振って歩いていく。

呼び止めることはできなかった。その背中が、もう来るなど言っ

ているようで、追いかけることはしなかった。立ち止まり、静かに歩き去る彼女を見送る。

携帯電話には一つの着信履歴が残されていた。映画の上映中、着信の相手は非通知設定。

誰のものか、今更ながら気がついた。

あの時、彼女にかけられていた魔法は、シンデレラの魔法は解けて十二時の鐘が終わりを告げていた。最後まで自分に付き合ってくれたのは、彼女の小さなわがまま、オレに対するささやかなお礼……だったのかもしれない。

歩く彼女の背を遠目に見ながら、留守電に残されたメッセージを再生した。

『……今日は、本当に楽しかった。ありがとう』

もう一度だけ聞きたかった、彼女の暖かな声が聞こえてくる。少しでもだけ切羽詰ったような、それでもいつももの余裕のある口調で。

『キミの意外な一面が見れてよかった。次がいつ会えるのか、それはワタシにも分からないけど、機会があったら会ってあげてもいいよ。でも……』

小生意気な言葉が、いかにも彼女らしい。

駅構内へと続く大きな階段の中段に、背の低い彼女の姿を見る。

行き交う人の中、どれだけ小柄な彼女であっても見失うことはない。振り返って真っ直ぐこちらを見つめている。

ケイタイからは、彼女の最後のメッセージが耳に届けられる。

『でも、名前は絶対に教えてやんない！』

あっかんべーと、彼女は小さく舌を出した。

* 登場人物紹介 + なかがき

【登場人物紹介】

ボク

本編の主人公。エロくて、ネガティブで、下品で、卑屈で、姑息で、面白ければなんでも良いと思っている。己のアイデンティティに悩み始めたお年頃。

校内放送番組のメインパーソナリティ。頭で考えた妄想を、何の迷いもなくそのまま口にできる人。しゃべり方は中途半端な敬語が基本だが、たまにテンパると素になる。

作者のイメージ設定：男だろうと女だろうと、公私ともにぶれない姑息な嘘つき

チル

右隣の席の友人。校内放送番組のアシスタント、兼ツツコミ担当でも、アドリブには弱い。

メインパーソナリティの彼を差し置いて、校内放送ではけっこう人気があるらしい。ヒメちゃんのせいで、報われない日々が続く。

イメージ設定：自称常識人（決してツンデレではなかった）

ミツチイ

後ろの席の友人。アホでバカな悪友。最近の主人公の様子に、どこか不審な点を感じている。

ヒメちゃんに惚れているようだが、その割にはどこか態度がはつきりしない男。

イメージ設定：頭の良いバカ

リッコ

斜め後ろの席の友人。チルを通じて、ヒメちゃんと知り合う。
イメージ設定：いい加減な姉御

プリンちゃん／ヒメちゃん

遙か彼方のプリン星からやってきたプリンセス。アニメ声。チルより胸が大きい。基本的に男には厳しいらしい。

校内放送番組に突然現れたピンチヒッター。その愛くるしい声に反して、しゃべる内容は下ネタばかり。校内放送では高い人気を誇るが、その正体は一切不明。

くながぎ

ここまでお読みいただきまして、誠にありがとうございます。

こんなにも読みにくくて品のない文章なのに、懲りずに付き合ってくださいっている皆様がいるということが、本当にありがたいことだと感じております。

そもそも、この物語は、私にとっては試験的な書き方をした実験小説でもありました。

校内放送でというネタについてもそうなのですが、全く無駄に長い地の文を書いている日常パートと、地の文がない放送パートという2部構成である点、詳細設定が一切ない登場人物達など。一人称

でありながら、視点一人称キャラの「」を曖昧にしてみたり、主人公には名前さえありません。

人によつては非常に読みにくい文章で、読む人を選ぶような話だと思うのですが、それでも面白いと言ってくださる方がいるというのは本当に嬉しいことだと思います。

まあ、書いている方は、たいしたプロット作りも推敲も全くせず、ただ思いつくままに書いていただけなのですが。

というか、書いていくたびに、次から次へと無駄に下ネタが思い浮かんでくる私の思考回路ってどーよ。。。

(本来、「中書き」という言葉は存在しないのかもしれませんが)

さて、今回は中書きとして書かせていただいておりますが、今後この物語について後書きを書く日が来ることは絶対にありません。

完結はしませんので。

なので、キリの良いところで少しだけ作者の言葉を挿むことにしました。

(第1章「黎明期」が終わり、第2章「揺籃期」という名の「ぷりん王国倦怠期」へ……)

この『声美少女伝説』という話はもう少しだけ続きますが、実はこの第十話までで私が書きたかったことはほぼ全て出し切っています。なので、後はネタが思いついた時に、私の気分転換程度に書いていければいいと考えております。

第十話みたいに盛り上がるような展開はやってこないかもしれませんが、どうぞ気長にお付き合いください。

それでは、最後に、（ヒメちゃんの放送風に、）

本放送局では、皆様からの投稿を広く募集しております。

ヒメちゃんとチル、ミツチイ達とのこんなシチュエーションが見たい、または放送でこんなコーナーがほしいなど、無茶振りという名のリクエストを気軽に寄せてください。

もちろん、ここはこうした方がいいなどのダメだし、つまらない、いい気になるな、など感想の一言だけでもたいへん励みになります。

これからも、皆様、どうかよろしく願っています。

2011年6月 yuzuki

「それで、アンタどうするつもりなの？」

向かい側に座るチルが、突然話を切り出した。

メニュー表から視線を上げ、チルを見返す僕の顔はキョトンとしていたように思う。テーブルの端にある呼び鈴のボタンを押す。

ピンポーン！

しばらくして、可愛らしい小さな前掛けエプロンをした店員さんがやってきた。

すみません、ボクは紅茶とフライポテトを。メニューの写真を指して店員に伝えると、メニュー表を閉じた。

それで、チルはどうするの？

「……」

ジト目で睨み返された。

「こちら。店員さんが困ってますよ？ 年は僕らと同じくらい、女の子のバイトの店員さんが少し焦ったような顔をしている。

「……あ。す、すみません、アタシはコーヒーを」

かしこまりました、と、内心の安堵をそぶりも見せず、優雅に一礼をして店員さんは奥へと戻っていった。

ふー、やれやれ。僕はお冷の水をコクリと飲んだ。

「……って、違うー！」

何がですか？

「アタシは注文のことを聞いたんじゃない、ミッチイのことをどうすんのって聞いているの」

……。

どうもこうも、特に何もしませんよ？

バカだろうとアホだろうと、変態だろうと、あれでも友は友。無

下に扱うつもりはない。

「アンタさ、あの日ミツチイに何言ったの？」

首をひねる。首をかしげる。はて、特に変なことを言ったつもりは全くないのだけど。

「最近、見えて気持ち悪いんだけど」

前言撤回。うん、友達付き合いも考え直した方がいいかな。

「結局、映画は最後まで付き合ってたの？」

問い詰めるようにチルが聞いてくる。

うーん、見たような見ていないような。映画の一番おもしろいところを抜けていたので、最後の大団円を見てもいまいち感動しきれなかった。

「変身能力って、そんなに持続時間あったんだ」

……。

あるわけがない。映画が始まって、わずか数分で元に戻った。映画上映まで保ったことが奇跡のようなもの。ただし、多少の猶予、トイレに駆け込むくらいの時間は稼げるようになったので、強いてあげるとしたら。

気合と根性で、なんとかしました。

「なんとかなるの？」

なるわけねーだろ！？

自分で答えておきながら、思わず言い返してしまった。

「あのさ、ミツチイに、映画終わった後に撮らせてもらったっていうケイタイの写真を見せてもらったんだけど」

あんのバカはどこまでベラベラ話してんだ！？ 思わずテーブルに拳を叩きつけた。大きな音はしなかったものの、数名の客が驚いてこちらを振り返った。

そもそもアレは撮らせてあげたのではなく勝手に撮られたのであって、喋れなかったボクには拒否することも怒ることもできなかった。

「あの写真って、ひょっとして……」

言うな！

正直、一番驚いたのは自分自身だ。鏡を見て、「あれ？ これってなんとかなんじゃね」とか思ってしまったことになり落ち込んでいた。

「なんていうかさ、あんたみたいにパツとしない顔の方が女にする
と映えるんだなって思ってた」

だから、もう言うな！

ミツチイのケイタイ奪って削除してくる！

本気で席を立とうとした、その時。

「お待たせしました。フライポテトとドリンクになります」

店員さんに出鼻を挫かれる。ポテトの山を見て大人しく座りなおした。

「紅茶の方は？」

あ、ボクです。コーヒーはチルへ。また一礼をして、店員さんは戻っていた。

暖かい紅茶を一口すする。ふー。

そして、ボクが頼んだはずなのにボクが手をつける前に、まるでオマエのものはオレのものオレのものはオレのものみたいに、チルが遠慮のかけらもなくポテトを食べながらボクに話す。

「それで、その変身能力の原因とかは分かったの？」

また一本また一本とチルの口の中へと消えていくポテトを涙目で見つめながら、ボクは答える。

原因が分かったら、こんな苦労はしていません。

チル、食べすぎ。ポテトを取るふりをして、さり気なくお皿をチルから遠ざける。

まあ、強いて挙げるなら、チルの手料理かと。

「そ、それに法則性はなかったんでしょ！ そもそも食べてなかったっていつも変身してるじゃないの。仮にそれが原因だとしても、それならそれで対処の仕様があるわけだし……」

さも自分に責任はないというように、まくしたてて話す。

毎回の变身には関係なくとも、最初の变身時にトリガーとなっている可能性はある。あくまで仮説だけど。

と、言い忘れていたかのように、軽く付け加えて話す。

それから、この体質が人に伝染する可能性も……。

ポテトへ伸びたチルの手が止まった。

ひよつとすると未知の病原菌に感染していて、それが皮膚や粘膜を通して、最悪空気感染で人に広まっていることだってあるかもしれない。神妙な顔でボクは考察を述べていく。

「い、いや、まさか、そんなバカなことあるわけが……」

あくまで冷静を装ってチルはコーヒーをすする。いつも入れるミルクを忘れているところを見ると、内心はかなり動揺しているらしい。

ないとは言いい切れませんか？ 家族以外で、そして家族以上に変

身の現場に何度も立会い、第何回かの放送では同じスプーンで間接的にプリンを食べ合っている　そうですね、仮にこれを『ぷりん合い』と名付けます　このぷりん合う二人の間には、未知病原菌も行ったり来たりと大忙し。

「ちよ、ちよつと。その誤解を招きそうな言い方はやめて。それに、アレは――」

ただの友情を深めるための『ぷりん合い』です。

「言い方なんてなんでもいいから。アレは、アンタが勝手につつこんできただけで」

そんな身勝手につつこんだわけではないですよ。ちゃんと、事前に言葉と愛撫で（プリンを）よく解きほぐし、初めてでも痛くないよう十分に（プリンのカラメル）蜜を絡めて、優しく頬張るように口の中へと誘導してあげたじゃないですか。

「だからやめい！」

その瞬間、チルの表情が凍りつく。通りかかった先ほどの店員さんが、驚いたようにこちらを見つめている。チルと視線が合うと、慌ててそそくさと店の奥へと引っ込んでいった。会話は丸聞こえだ

つたらしい。チルは顔を赤くして俯いた。

この程度で恥ずかしがっているようでは、チルもまだまだ青いですね。

「神経が大根みたいに図太いアンタと比べんな」

そりゃあ、変身し始めた最初の頃は、周りを気にして神経すり減らしてましたけど、こう何度も何度も変わってたら、神経も打たれ強くなってガツチガチの鋼の硬度を有するようにもなりますって。

「そう？ 身体変わる前から、こんな感じだったと思うけど」

……。

チルは当たり前のようにそう言うが、変身を何十回と繰り返す内に、確かに吹っ切れた部分がある。

男では言い淀むようなエロネタも平気になった。いくら気心知れた相手とはいえ、言ってしまったてもいいものか戸惑うような、チルを困らせるエロネタに対応できる応用力を身につけた。セクハラと言われることなく、「あくまでこれはスキンシップです」と言い張るだけの言い訳と立場を手に入れた。

「いやあ、放送の幅が広がって良かったですね。」

「アンタが手に入れたスキルは、エロネタだけかよ。それもネタの幅が広がったというより、底がどんどん深くなっていつてる気が」
そうですね。それも底なし沼のように、他の誰かに引き止めてもらわないと這い上がれないくらいに、ずるずると沈み込んでいく感じがしますね。

「自覚あるなら、少しはシモネタを控えなさいよ。そのせいで、最近変な噂が流れているみたいで……」

以前からまことしゃかに囁かれていた噂。ぷりんちゃんはチルとレズカップルだ、いやいや本命はミツチイだ。そんな話が広まる以前から存在した、公然の秘密という名のはた迷惑な勘違い。

曰く、あの二人は付き合っていると。

ねーよ。

「ないわー」

二人してため息をついた。

何言つてんだよどう見ても夫婦漫才じゃねーか、とはミッチィの言葉。余計なお世話だ。

ボクが女性化するようになって、確かにチルとの距離は縮まった。今ならチルが女だからというプライベートな領域にも平気でズカズカと踏み込める気がする。

「おい」

しかし、確実に越えられない壁というものは存在する。

「性転換という、男女の壁はあっさり飛び越えたくせにねえ」

越えたくて越えたんじゃないやい。

今のところ普通に生活できているが、私生活に支障をきたすのは、はっきり言つて時間の問題である。

性別が誤魔化せている内は問題ない。ボクだって男だ、いつかはヒゲだつて生えてくるし、身長も伸びて体格とかも良くなって、筋肉もついて男らしくなって……。

「……」

……。

「……なるの？」

……夢は諦めたらそこで終わりですよ？！

「夢というより願望だよね」

ボクだって男だ、いつかは男らしくなって可愛い恋人作つて……。

「その未来の可愛い恋人といちゃこいてる時に、突然可愛い女の子になつちやったりして」

あーあー、やめてくださいそんな現実。その光景がリアルに想像できるだけに、本気で恐ろしいです。

「あのさ、もう変身の原因とか法則性とか、何にも分かってないんでしょ？」

ええ、はいはい、そうですよ。

「ねえ、アタシ思ったんだけど、男らしくなるとか有り得ない未来見据えるより」

有り得なくなんかない！

「はいはい、あるかもしれないけど程遠い遙か彼方の未来見据えるより、今みたいに男にも女にも見えるようなユニセックスな感じの外見であれば、誤魔化して生活ができるわけでしょ？」

！

はい！ 先生、思いつきました。目からウロコです。

ワタシ、今からオカマの中のオカマを目指します！

「……いや、何もそこまで言っていないけど」

さっすがチルチル、男であり女でもあり、全てを超越した新人類であるオネエキャラを目指せば、万事解決ってわけね！

ボクは紅茶を一口飲んだ。ふー。

ねーよ！

「だから、誰もそこまで言っていないから」

そんな未来を考える方がよっぽど現実的なのかもしれない。なんか本気で目から汁が出てきそうです。

「本当に、何も法則性が見つからないの？」

ありません。あつたら藁にもすがる思いで調べつくしています。

まあ、強いてあげるなら、同じ日に2度変身することはないってことくらいで。

「今日は、朝に変身してたよね？」

よく見てますねえ。ええ、そうですよ、二限目の体育までに元に戻って助かりました。だから、今日はもう変身することは……。

……。

「……？」

……。

「ま、まさか……」

……。

「……」

……。

……こうして人類は、また新たな一步を踏み出したのです。

唯一と喋っていたいい、ただ一つの分かっていた法則、その壁をあっさり突き破って、ボクはまた女へと変身した。

ボクは鞆の中からカツラを取り出すと、周りの目も気にすることなくパスツと頭に被った。テーブルの端の呼び鈴ボタンを押す。

ピンポーン！

はい、と奥から声が聞こえ、再び店員の女の子が姿を現す。

すみませ〜ん、紅茶とコーヒーのおかわりを、それからプリンパフェをお願いします。

「か、かしこまりました……」

何やら戸惑いながら、店員さんは奥へと戻っていった。

紅茶の残りをクイツと飲み干す。ふー。

スパーン！

と、チルにおしぼりを投げつけられた。いった〜い、乙女の柔肌になつてことを。

「黙れ、ナチュラルに変身してんじゃない！」

こちらを睨みつけながらも、騒ぎにならないよう声のボリュームは抑えてある。てか、そんな気使う余裕あるならおしぼり投げつけんな。

自然にすれば、意外にバレないもんなんですつてば。

「やっぱり、アンタって鋼鉄の神経してるよねえ」

失敬な。そもそも、チルが変なフラグ立てるから、また変身したんじゃないですか。

「アタシのせいじゃないアタシのせいじゃない」

しばらくして、お茶のおかわりとデザートを持って店員さんがやってきた。同じ店員さんだが、今度は動揺のかけらも見せずに笑顔でボクの前には紅茶を、対面のチルにはコーヒーを置く。

そして、空いたカップを下げると、ふと迷ったように口を開いた。

「あ、あの、お客さま？」

その目は、ボクを見つめている。

な、なんですか？

「失礼ですが、お客様は……女性の方、ですよね？」
どちらに見えますか？
聞き返してみた。

「……」
……。
「……そ、そうですね。すみません、おかしなことを聞いてしま
つて」

いえいえ、よく聞かれます。コレ、カツラなんですよ。
アハハハハ。

お互いに乾いた笑みを浮かべる。

何事もなかったように店員さんは一礼すると、そそくさと戻って
いった。結局、彼女はボクのことをどちらだと結論づけたのだろう
か。

紅茶を一口飲む。つられて、チルもコーヒーを口にす。

ふー。

「……店を出ようか」

待て。デザートを食べからず。

人目を気にし始めるチルをよそに、ボクはパフェのテッペンに飾
られたプリンにスプーンを通す。うん、んまい。チル、そろそろ観
念して、開き直った方が身のためですよ。カリカリしないで、プリ
ンでも食べて落ち着いてください。はい、あ〜ん。

「……いない」

ぷりん合いを否定されました。知ってますか？ ぷりん星では、
ぷりん合いの拒絶は絶交を意味している

って、自分で拒否しといて、自分のティースプーンで反対側から
パフェをつつかないでください！

パフェを食べて少しホツとした表情を見せたチルは、今度はスプ
ーンでパフェではなくボクを指して言う。

「アンタってさ、全然自覚ないでしょ？」

何がですか？

「アンタのその声のこと」
声ですか？

男の方であればメス犬どもを濡らすワイルドでダンディなハニーヴォイス、女の方であればまるで発情したオス猫どもを呼び寄せる甘いスウィートヴォイスが

「はあ……」

ため息ついて無言でパフェの山を削らないでください。

「男の方とはかく、女の方の、今のアンタの声はすごく目立つってことを自覚しているのか？」

この高い声がですか？

「アタシやリッコなんかと比べても全然高いじゃない。自分で自覚とか、違和感はないの？」

もう慣れました。

そりゃあ最初は戸惑いましたが、頑張れば低い声も出せるということがわかりましたし。そもそも自分の声を真面目に聞いたことなんてない。

「ラジオのバックログ聞いてないの？」

やだなあ、聞くわけじゃないですか。ワタクシ、過去は振り返らない女なんです。

「アンタは、少しは過去を振り返って反省とかした方がいいんじゃない？」

高いソプラノ声。リスナーに言わせれば可愛いアニメ声。客観的に聞けば、確かに目立つ声なのかもしれない。先ほどまで感じなかった、他の客達からの視線を感じる。変身がバレたとは考えたくない。

「今日、部長にコレ渡されたんだけど」

と言つて、チルはポケットから小さな携帯電話サイズのものを取り出した。なんですか、それは？ ラジオ？

「ICレコーダー。部費で購入したんだって」

ボクに手渡すと、チルはコーヒーにミルクを入れながら話す。

「なんでも、不定期でしか出れないのなら、コレに事前収録しておけばいいんじゃないのかって」

おい。こんなもの購入する資金があるなら、出演料よこせつての。受け取ったICレコーダーを眺める。これ見よがしに赤い録音ボタンがついている、スイッチオン。は〜い、プリンちゃんです。ポチツとな、再生。

『は〜い、プリンちゃんです』

おーおー、意外にきれいに録れてるもんだ。というか、こんな声だったんですね、自分の女声を初めて聞きましたよ。

パフェへと視線を戻すと、テツペンのプリンは跡形もなく消えていた。おい。

「どうする？ この後、試しに収録してみる？」

スプーンを咥えながらチルが言う。

キ〜！ プリンの恨みは重いですよ、末代まで祟ってやる〜！

……はい、そうですね、今日は止めときましょう、PCないから投稿が読めん。チルにひと睨みされて、へびに睨まれたカエルのように大人しくなった。ICレコーダーを自分の胸ポケットに仕舞う。「……………それ、売るなよ」

ギクツ。

いえいえ、出演料代わりに質に入れようとか、決してそんなこと考えてないですよ。誤魔化すように紅茶をずずつと啜る。ふー。

「ともかく、今日は収録しないとしても、変身するのがランダムじやあ、収録しようと思ってもなかなかできないんじゃない？ 今日みたいに、アタシと一緒にいるとも限らないだし」

なんだかんだで気がつけばいつも一緒にいるとかいうのは気にしないことにします。

「どうする？」

どうするとは？

「これは部長からも言われたことなんだけど。一回、アンタ一人で収録してみる？」

！！

一人プレイと行えと。ツツコミ不在のポケオンリーの泥沼試合を行えと。

「いや、その方がアタシも楽になって」

チルチルひどい！ 大人のオモチャ（レコーダー）渡してオナ
ープレイを強要するなんてひどいわ！

「そうそう。しかも、それを後で公開しようってんだから、かなりの鬼畜プレイだよね」

あ、でもでも、チルチルがやれっていうならワタシはどんな愛のカタチでも応えていきたいって思うの。だから、チルを恋焦がれながらがんばってみるわ、うん、写真と使用済みの体操服があればたぶん3回くらいはイけると

カチャン！

騒がしかったファミレスのフロア内に、その食器の音はやけに静かに響いた。一瞬だけ、お客達の会話が停止した。音を立てた店員、ボクらのすぐそばを通りかかった女の子の店員さんは、極力こちらを見ないよう意識しているかのように戸惑った様子で、「し、失礼しました」と一言だけ言った。他の客達は、すぐに自分達の会話へと戻る。食器を落としかけて危ういところで持ち直したその店員は、決してこちらを見ようとはせずにまた奥へと戻っていった。

再びざわめきの戻った店内で、ボクとチルのテーブルだけが隔離されたように空気が凍り付いていた。どちらかともなく視線を合わせる。

「出ようか」

あ、待って。まだパフェが残ってる。

紅茶をまた一口。ふー。

ねえコレ何、何の羞恥プレイなの？！ と、そわそわとし始めたチル。トイレなら、突き当たりの左ですよ。

「違うわよ」

おしぼりをこちらに投げつけて、チルは席を立った。なんだ、結

局行くんじゃないですか。尿意に耐えられなくなったのか、奇異の視線に耐えられなくなったのか。うん、二度とこのファミレスに来る事はないだろう。

チルの背中を見送ると、今度は反対側から窓を叩く音が聞こえてきた。

コンコン！

窓を振り返る。

リッコがいた。笑顔でヒメちゃんヒメちゃん何してんのと手を振る。声は聞こえないけど。

すると、机の上に残されていたチルの携帯電話がブルブルツと音を立てた。リッコを見ると、手を振るもう片方の手でケイタイを耳に当てている。チルのケイタイの、よくわからない変な人形のストラップを引っ張って、チルの電話をとった。もしもし。

『はぁ〜い！ ヒメちゃんヒメちゃん何してんの？』

予想通りの答えしてやんの。

見ての通り、屋内での露出羞恥プレイから放置プレイに変わったところですよ。

『……………え？』

第十二話 - 第5回ぶりんちゃん放送局 -

ニッポンの未来は

Wow Wow Wow Wow

世界がうらやむ

Yeah Yeah Yeah Yeah

いえ〜い!

『や〜ん、ヒメちゃんサイコー!』

いやあ、一度思いっきり歌ってみたかったですよ〜。

あれ? チルチル、なんですかその目は?

「いや、別に……」

『と、次の曲は』

ちよつと、トイレ行ってきます。

『ほいほい』

ガチャン。

はい、皆さんこんにちは。お久しぶりです。

コレが無事に放送されているということは、チルは自分で自分の自爆スイッチを押したということですね。

え、アタシこんなの知らないって?

放送室でポカンと口開けてるチルの様子が目に浮かぶようですが、もう手遅れです。はい、部長氏、チルがスイッチ切らないように取り押さえていてください。

チル、あの日何を言ったか思い出してみてね〜。

もつとも、こちらはこれから収録ですので、どんな爆弾発言が飛び出すか神のみぞ知る。もとい、チルのみぞ知るところです。

ただ今ワタクシ達は市内某所のカラオケボックスに来ております。今回の放送分は、なんとこのICレコーダーを使って学外での収録を行いたいと思います。

まあ、収録と思って話してるのはワタクシだけで、他の二人は何も知らないのですけど。

申し遅れました、本日のパーソナリティを務めさせて頂きますワタクシ、遠い遠い彼方の惑星プリン星からのピンチヒッター、プリンちゃんです。ワーワーパチパチイ。

ふー。

一人でやってもツツコミがないと悲しいですね。部長さん、やっぱり無理です。

お願いだから、ヒメちゃんにオナープレイ強要しないでえ、一人じゃ満足できないの！

話が逸れました、そしてあとの二人はチルと、おそらく収録後に快く出演を了承してくださっているであろう、マイク放さないでお馴染みのリッコです。収録のメインはワタクシとチルの会話の部分になると思いますので、リッコの歌声はバックミュージックとして適当にお聞き流してください。ちゃんと音が拾えているか心配ですが、どこのキチ イ部長氏が放送内容を文章化するという変態プレイも行っているみたいなので、雑音は気にならなくならないと思います、問題ないですね。

なぜワタクシがこんな学外で、通りかかった店員さんにあの子何独り言話してんのと奇異な視線で見られながらも内緒で収録を行っているのかといいますと、とある2年A組のMくんから様々な情報を仕入れてきたからです。

Mくん曰く、

『最近の放送ってチルをいじる投稿が少ないみたいなんだけど、ヒメちゃんなんか知ってる？』

ええ、よく知っておりますとも。

届いた投稿は、皆さんの期待に応えるべくチルの制止も全て無視

して読めるだけ読ませていただいているのですが、ワタクシも全てに目を通す時間があるわけでもないので、投稿ボックスの内容は一度放送部の構成作家さんの目を通してからワタクシのもとに届くものがあります。

なんと、その構成作家さん「チルなのです！」

これではチルをいじるおいしいネタが届くはずがない。かろうじてそのフィルターを潜り抜けたものだけをワタクシが読ませていただいているのです。ひどい、なんとという職権乱用の鬼。

というわけで、本日は放送部の影の権力者、アシスタントとかいう助手のくせに気がつけばメインの彼よりも人気があるのもつぱらの噂の彼女、チルの生態について検証していきたいと思えます。皆様は、ワタクシの胸ポケットに忍び込ませた盗聴器の音を拾ってハアハアシコシコやってるストーリーカーの気分になって無防備な女の子の会話をお楽しみください。

なおこの放送は本当に事前収録ですので、皆様からのご質問にリアルタイムで答えることはできませんが、いつものように投稿や感想は掲示板などで受け付けております。今後の放送に役立てていきたいと思えますので、よろしく願います。

それではいきましよう！ 本日の曲紹介、2曲目は

ガチャン！

『ヒメちゃん遅い』

リッコの歌声、トイレまで響いてましたよ？

『うそ〜?!』

あ、タイミングバッチリですね。チル、マイク貸して。

ぼ〜によぼ〜によぼによ さかなの

『きゃー、ヒメちゃんかわいい〜！』

ねえチルチル、最近好きな男の子とかがっていないの？

「ブツ！」

あらやだ汚い。

「アンタが変なこと聞くから」

失敬な。何もウーロン茶吹くことはないでしょうが。

「……どうしたの？　なんか変な物でも食べた？」

ひどいチルチル、いくらなんでも言っついていいことと悪いことが……はい、すみません、そんな目で睨まないでください。ちよつとしたガールズトークを試してみたかったです。

「……」

……はっはっは、やだなあ。そんな顔で見つめないでください。何もありませんから。

「アンタが変なこと言い出すと、なんか裏があるような気がして」
やだなあ、あるわけないじゃないですか。ただの興味本位ですよ。
チルつてどんな男の子が趣味なのかなあ〜って。

「別に……」

例えば、2年C組のEくんとかどうなのかな〜って。

「ブツ！！」

あらやだ汚い。

「ちよ、ちよつと待って！　だ、だだだ、誰に聞いたのよ！？」

あれ？　何かおもしろい反応を見せましたよ？

「なんでアンタが知ってるのよ！？」

えええ〜、なんのことですか？　プリンちゃんよくわかんない〜。

「とぼけんな！」

ええ〜、チルがメールでデートに誘われたとか、まさかそんなのあるわけないですよね〜？

「誰から聞いたの？！」

きゃ〜、胸倉掴まないでください。

誰っつて、そりやもちろん、あの歌って踊ってる女。

『いえーい！！』

いえ〜い！

「リッコ！ あれほど人には言うなって言っておいたのに！」

『えー！ ヒメちゃん、もう言っちゃったの？ セツかくネタになりそうだったから、こっそり教えてあげたのに』

大丈夫です。きつと有効活用してみせます。

それで、デートには行っただんですか？

『あ、結局どうしたのかワタシも聞いてない。あれからどうしたの？』

「う……」

リッコ、そのメールが届いたっていうのはいつ頃？

『うんとね、たしか前の中間テストの後だったと思うから』

じゃあ、うまくいっていれば嬉し恥ずかしの初デートも終わってキスなんかしちゃったりして乳繰り合っちゃったりして。

『やーん、ヒメちゃんって親父くさい』

失敬な。

……で？

『で？』

「う………け、結局、デートには行ってない」

ちえ、つまんないの。

『つまんないの』

あ、次もリッコの曲。って、なんで3曲もまとめて入れてるんですか？！

『だって、チルってばあんまり歌わないし。その分ワタシが』

「……」

で、なんでデートには行かなかったんですか？

「アンタもしつこいわねえ」

で？

「……そ、それは、その、あんまりエくんのこと知らないし、別に好きってわけでもないから」

知らないんだから試しにデートに行ってみればいいんじゃないですか。

それとも、他に一緒に行きたくない理由でもあるんですか。

「べ、別にそういうわけじゃないけど」

タイプじゃないってところですか。イクんって人づての情報によると、わりと明るくて親しみ易い子らしいけど。

「う〜ん……まあ、強いてあげれば、あの騒がしそうでバカっぽい感じの性格がアタシには合わない」

「ご愁傷様、イクん。」

それじゃあ、イクんの顔は悪くないと。

「アタシ、顔とかはそれほど選り好みする方じゃないとは思っただけど」

チルって、俳優も渋いオヤジの方が好きだもんね。

「い、いいじゃない、芸能人の好みなんて」

それじゃあ、2年C組のYくんとかHくんみたいなタイプは？

「ゴツイ体育会系はムリ、なんか汗臭そう」

Yくん、Hくん、ご愁傷様。

バツサリ斬りますねえ。やっぱ、チルって面食いじゃね？

「う、うっさいわねえ、人間第一印象が重要なよ。そ、それより、アンタはどうなのよ」

な、何がですか？

「最近、アタシ思うんだけど、アンタの周りで浮いた話ないなあっと思ってたら、なんかミツチイといい感じだっというじゃない。ひよっとして、そっち気が」

ない！ 断じてない！！

『そうそう、ワタシも他の子から聞いてきてっ頼まれてたんだけど。ヒメちゃんってミツチイと付き合ってるの？』

どんな噂が広まってるか知りませんが、そんな事実は一切ないです！ というか、雑音は黙っててください。いえ、大人しく歌ってください、今大事な話の途中なんです。ほらほら、次の曲はリッコの十八番ですよ。

『あれ？ 入れた覚えないんだけど』

ワタクシが変わりに入れておきました。

それですね、あとは2年B組のNくんみたいなタイプは？

「う……まだ引つ張るの、そのネタ。そうねえ……Nくんってどんな子だっけ？」

Nくんは、身長がどちらかという小柄な感じの……。

「ああ、確かアンタと同じくらいの背の低い子よね。悪いけど、アタシより背の低いのはパスだわ」

Nくん、ご愁傷様。

というかなんですかその嫌味を含んだ言い方は？

「別に。ていうか何この質問攻め。今更アタシの好み聞いたって

」

さあさあ！ しかし本命はこの人、3年A組K先輩、なんと元生徒会執行部員の登場だ。2年生への引継ぎも終え、大学受験へと勤しむ傍ら、唯一の楽しみは週に一度の校内放送、彼女の声が聞けたなら辛い勉強にだって耐えられる。目指すは一流T大。本命馬の登場だ。チル、いかがですか？

「いや、いかがとか聞かれても。アタシ、K先輩ってあんまりよく知らないし。ていうか、コレは何？」

実はですねえ、匿名希望の2年A組のMくんより情報をいただきまして、どうやらチルに興味があるらしい人達を厳選の上ピックアップしてみました。

「ほ、本当なの？」

情報源がMなので怪しいと言えば怪しいですが、他の人づてに聞いて裏の取れたものから並べています。

「K先輩が……」

ほほう、なにやら脈がありそうですね。チルの年上好きのツボをついたようです。K先輩、チャンスですよ！

この方は熱心なリスナーさんで、ちよくちよく投稿もしてくださってるようですよ。

「そっなの？」

ええ。ワタクシも知らなかったのですが、掲示板にも書き込みをされてるようで。ケイタイで見れるかな、たしかこの辺の……。

「ああ、このIDの人！ よく見るよく見る。でもさ……」
「なんですか？」

「この人って、投稿もよくしてきてくれるんだよね」「らしいですよ？」

「この人、アタシじゃなくて、完全にアンタの　ぷりんちゃんシ
ンパの人だよね？」

……。

「……」

……。

「……」

……「ご愁傷様、K先輩。」

「ご愁傷様」

チル、さすが構成作家、伊達に一番投稿に目を通してただけのこととはありますね。

「その毎回必死で番組構成してくるのに全てをぶち壊すのはどこの誰よ？」

ふー。

さ、さてと、外の空気でも吸ってこようかな。

『チル！　今度はアンタも歌いなさいよ！』

「ええー！　う、歌うにしても、もっと他に曲が　」

はいチル、ちゃんとマイク持って。

プリツキュア、プリツキュア

ガチャン！

はい。

チルの生態について、少しでも分かっていただけでしょうか。

これに懲りず、今後もチルの生態について迫っていきたいと思います。2年A組のMさん、特別ゲストのリッコさん、貴重な情報をありがとうございます。

そして、ここまで聞いてくださったりリスナーの皆様、本当にありがとうございます。

本日のお相手は、初めてのカラオケにw k t kな、プリンちゃんでした。

バイバイ、またね〜！

さーで、次は何を歌おっかな〜。

私信です。

部長氏へ。これを放送したくば、以下の口座に指定の額を入

ピ
ブチン！

第十三話 - 第6回ぶりんちゃん放送局 -

カランカランッ！（グラスの中の氷の音）

皆さん、こんにちは。お久しぶりです。

第……何回目でしたっけ？ の、放送を始めていききたいと思えます。司会・進行役のプリンちゃんです。

「アシスタントのチルです」

はい。

本日の放送は、出張放送局ということで、またもや収録音声の垂れ流しを行っていきこうということですよ。

しかし、前回放送と異なるのは、チルが収録に気づいているという点です。

「はい……」

……

「……」

チルは、前回のドッキリ放送によほど胸を打たれたようですね。……なんていうか、物理的にもグサグサと心打たれた気分です。もうコイツを手放ししとくのは、本当にマズイような気がして「

しっかり手綱握っててくださいよ、ワタクシの命綱なんですから。命綱なんだ……」

はい、深い深い泥沼に沈み込んで、社会復帰できないくらいの闇に落ちたとしても、きっとチルが救ってくれると信じてます。

そんな覚悟でワタクシ、当番組のパーソナリティを務めさせていただきます。ただいます。

「校内放送番組にそんな覚悟いらない。てか、首輪とかじゃないんだ……」

はい、イメージとしては火サスに出てくるような崖の上から命綱一本で落ちかかっているところを、後ろからチルにツンツン足先で突

かかっているという

……はっ！

「ご、ごめんなさい、チル！」

「な、何よ、いきなり……」

ワタシ、チルの気持ちなんてちっとも考えてなかった。チルの相棒失格だわ！ チルがそんなことまで望んでたなんて、ワタシ、考えもしなかった。それならそうと、もっと早く言ってくれば良かったのに。

「だ、だから、いったい何が……」

ワタシ、これからはチルの いえ、ご主人様のペットになります！

「……は？」

どうかワタシの首に、首輪をつけてください！

このメス犬に、ペットとしての証を、わんわん！

「……」

……わんわん！

「……」

……あ、あの……そんな冷静に、蔑んだ目で見られても困るんですけど。

「こんなペット、いらない」

ひどい。

鬼、悪魔、人でなし。最近、なんかホントに冷たいですよ。せめて、全力のボケに対しては、礼儀を持って全身全霊の力を込めてツッコミを入れていただきたいと

「大人しくジュースでも飲んでなさい」

はい。

カランコロン！

コクリ（飲む音）

ふー。

改めまして、本日の放送を進めていきたいと思えます。

今日は出張放送局ということで、なんといつもの放送室を飛び出して、スタジオTHにて収録を行っております。

「……何？ スタジオTHって？」

T（チルの秘密がいつぱい詰まった）H（部屋）。

ねえねえ、チルってどんな下着つけてるの？

「って、きゃー！！ 問答無用でダンスを開けるなーっ！」

ほうほう、チルは淡いブルーやピンクが好みと。あ、こっちのク

ローゼットは

「だから、物色するなァー！！！」

あれ？

おかしいですねえ、ワタクシのプランによると、このクローゼットから雪崩が起きてプリンちゃんは生き埋めになるといふ。

「起こるか！ 勝手に変なキャラ設定作るんじゃない！」

なんか普通すぎて、プリンちゃんつまんない。

「つまらなくていい。というか、さっきまでは大人しかつたのに、収録が始まるとなんでこうコイツは……」

やだなあ、力蓄えてたんですよ。油断させるために、借りてきた猫を10匹くらい被ってたんです、にゃあにゃあ。

そもそもこんなネタの宝庫を目の前にして、大人しく収録だけして終わるはずが

「あのさ、ワタクシから招きといてなんだけどさ。音響くから、あんまり暴れないでよね？」

はい、すみません……。

というわけで、本日はチルのお家にお呼ばれしています。

ワタクシ一人にICレコーダー持たせると何やらかすか分からないうと、部長氏とチルの両方から嚴重注意を受けまして、結局、余裕があったらチルと二人で収録してこいと、まあそういうことになっただけです。

「せめて、これ以上被害者が増えないうちに……」

ワタクシもチルの家にまで遊びに来るのは久しぶりなんですよね。

あ、このポスター、まだ張ってたんだ。

「す、好きなんだから別にいいでしょ」

ねえねえ、『ぴんぴん』はまだ持つてるの？

「さ、さあ、なんだっけそれは……」

あ、あつたあつた、ありました！ ふとんの中にしっかりと隠してありました。あいかわらず、これがないと寝れないんですね。

「だあ〜！！ 別になんだったいいでしょ！ それがないと落ち着かないんだもん！」

えっと、分からない人達に説明しておきますと、『ぴんぴん』は哺乳類ではありません、正面から見るとマヌケな顔に見えます、生息域は主に緯度0度から90度の間です。

「説明になってないから」

はい、ではチルの方から説明していただけるそうです。

「……ええ?!」

それでは、最終ヒントを。

あ、いえ

ネクストコナ ズヒ〜ント!

チル、この動物の鳴きマネをしてください。

「ええ〜っ!?! な、なんでアタシが……」

さ、ほら、早く早く。

『ぴんぴん』は、どうやって鳴くんですか？

「え、え〜っど……グ、グエ〜、グウエ〜?」

……

「……」

え、え〜っど……

「いや〜っ!?!」

ださい。

「うう……」

ところで、どっかの地方のおみやげ屋さんに『おっぱいプリン』
て、ありますよね？ あれってきつと、ワタクシの胸みたいにやら
かくて

「だからあー！ー！」

コンコンー！ ドアを叩く音

「はいー！」

おっと、誰か来たようです。

「ストップ、録音止めて」

ほいほい。

おっと……えー、それでは今週の曲紹介です。どーぞ。

「お母さん、お菓子とかは別にいいって」

『いいじゃない、せっかく来てくれたんだから……あらっ、』

すみません、お邪魔してます。

『女の子？』

あ、はい。

はじめまして。ワタクシのことは、ヒメちゃんって呼んでください。
いつもチルとは仲良くさせてもらってます。

『あら、そうなの。それじゃあ、私のことはマチコちゃんって呼ん
でくれる？』

はい、分かりましたマチコちゃん。

『ヒメちゃんって可愛いわね』

「人の親をちゃん付けで……」

『固いこと言わないの。ヒメちゃん、今日はゆっくりしていいってね』

はい、ありがとうございます。

『それにしても……チルちゃん、今日連れてきたのは男の子じゃなかったのね』

「……え！？」

ほほう？

「ちょ、ちよつとお母さん、何言ってるの！」

チルが男を連れこんでるんですか？

「こらそこ、食いつかない！」

『え、そういうわけじゃないんだけど。さっき上がってくる時に、男の子に見えたから』

……

『別にヒメちゃんが男の子みたいっていうわけじゃないのよ？ こんなに可愛い女の子だし』

はい……

『ただね、近所に住んでて昔よく遊びに来てた男の子、え〜と名前は確か』

ジュジュ〜ツ！（ストローで吸う音）

『くんっていう子なんだけど、ヒメちゃんに少し雰囲気似てたから』

え〜、そうですか？

きつと気のせいですよ？

「今、なんかすっごいファインプレーを見たような……」

それも気のせいです。

『チルちゃん、あの子でもいいから、たまには男の子連れてきてほしいなあ』

「……それはイヤ」

『ヒメちゃんなら、何か知ってる？』

何がですか？

『チルちゃんからは、なかなかそういつ話ってしてくれないの。浮いた話とか、何か知らない?』

チルの話ですか?

そういえば、この前デートに誘われてましたよ?

『まあ!』

「こらっ! 勝手に言っな! それに、あの話はちゃんと断って…」

ふったんですよ、バカっぽい性格が気に食わないとかいう理由で。

『えっつ、そうなの?』

「人聞き悪いことを言っな!」

違っんですか?

きつとそういう理由だつて、全校生徒が認識してますよ。

「……そ、それもあるけど、でもそれが全部の理由つてわけじゃあ……」

『ものは試しで、とりあえず付き合ってみれば良かったんじゃないの?』

「人の親のくせに、なんてことを……」

まあ、良くも悪くも、チルは学校内ではすごい有名人ですから。

なかなか難しいかもしれませんよ?

『そーなの? チルちゃんつて、放送部で放送当番をやってるつて話でしょ?』

はい。それが回を重ねるうちに、その遠慮のない性格とキレのあるツッコミ、そして時折見せるツンデレっぷりに、校内ではかなりの人気を博しまして、今ではファンレターが届くほどに。

「そのファンレターの7割は、アンタのだけどね……」

いえいえ、甘く見てはいけませんよ?

ワタシの調査によりますと、我々に下手に近づくと放送で暴露されるんじゃないかという不安要素があり、それを顧みず神風のように特攻してきた猛者達の結果が7:3だったというだけです。潜在

的にいいなと思ってる男子の人数ははかり知れませんが、それこそ教室に1匹いれば10匹は確実にいるみたいで、まるでゴキブリのようには掃いて捨てるほどいるのではないかと。

『まあまあ、チルちゃん大人気なのね』

「そんなわけないでしょーが！」

いやいや、ワタシのプリンちゃんシンパに比べると、あそこまで変態的になれない釣り合わないと考えるマトモな草食系男子の多くは、全部チルの方へ流れています。

ヒメちゃん、ちょっと嫉妬しちゃいます。

他の汚らわしい男なんて見なくていいから！ お願いだからワタシだけを見て、チル！

『まあ！』

「いやいやいや、それこそないから。お母さん、本気で驚かないで」とまあ、そんな感じで、チルつてば全然自覚ないんですよ。

『あらーそうなの。まわりの男の子達もたいへんね』

ただ、本人がそんな感じなので、真剣に誠実に告白してくれば、チルつてこれで意外に押しとか情とかには弱いですから、きつとなくとなるとかと思っていますよ。

男子諸君、チャンスですよ？

『ヒメちゃん、どうかうちの子をお願いね』

はい、きつとこの子を一人前にしてみせます！

「そこ、勝手によく分からない同盟を結ばないで……」

『ヒメちゃんておもしろい子ね。これからも、良かったら遊びに来てね』

はい、ありがとうございますう。

ガチャ！（ ドアを閉める音 ）

以上、スペシャルゲストのマチコちゃんでした。

「……………え、ええええーっ！！？」

いやでも、チルの初めては、これからワタクシがいただきますので、それは誰にも譲れませんよ。男性諸君にお渡しできるのは、その後のワタクシの食べカスということまで。

「何言ってるの!? 　というか、音全部入ってるの?」
カットはしません!

「する!　ダメ、人の親まで勝手に出演させるな!」

まあ、今回の収録が放送できるかどうか、校内放送倫理委員会の采配に任せるということで。

「ダメダメ!　あの部長はそのまま垂れ流すからダメ、絶対ムリ!」
まあまあ、チルチル落ち着いて。

おやつプリンでも食べて冷静になってください、はいあ〜ん。

「もう今回の収録消す!」

ぎゃーっ!!　　ちよ、ちよと待って待って!?

ガッ!

ガガガッ!!

……

ピ

……

……

さて、続いては、お便りのコーナーです。

「何事もなく、始めたわね……」

しーっ!　　もうどうなっても知りませんよ?

早く投稿まわしてください。

「はい……」

『ヒメちゃんとチルへ。私は常々疑問に思っていることがあったので、投稿してみました。プリン星の姫様ならきつと答えを教えてくださいと期待しております』

ほうほう、いったい何でしょうね?

『プリンに醤油をかけて食べると、ウニの味がするというのは本当ですか？』

「待てい！」

噂の真相を解明すべく、ワタクシ、固定概念を全て投げうって、決死の覚悟で挑んでみたいと思います

「勝手に投稿をすり換えるな！ お母さんとさつき何話してるかと思えば……」

プルプルプルプル。

「両手に醤油とスプーン持って、震えてんじゃない！」

い、いいえ、違いますよ？ これは、恐れ慄いているのではなくて、ただの武者震いですよ……？

「強がりはいらないから」

投稿には、本当なら酢飯に海苔を巻いてその上にプリンをそつとトッピングしてほしいとの内容だったのですが、さすがにそこまでは用意できませんので、醤油オンリーでウニ風味を体験してみたいと思います。

チル、はいあ〜ん。

「アタシに差し出すな！」

新味覚体験のパイオニアとして、是非チルには後世へ名を残していただきたいと。

「絶対イヤ！」

仕方ないですねえ。

では、ワタクシ自ら先陣をきって体験してみたいと思います。皆さん、屍は拾ってください、そのまま大海原へ捨ててください。

いね

パクッ！

……

「……ど、どっ……」

……つっ！

「っー！」

……

「……」

……え、そろそろ時間も押してきておりますので、本日の放送はこのあたりで。

「ちょっと、感想はどうした?!」

……あいかわらず、チルは墓穴掘りまくりですね？
そんなに言うなら、食べてもらおうじゃないの！

「うえええ〜！」

はい、あ〜ん。

「うう〜、なんでアタシがこんな目に……」

はい、早く食べる！ あーん！

「むぐむぐ……」

いかがですか？

「……ごぶっ!?!?」

はい、それでは感想を。

「~~~~っ!?!?」

はい。

まあ、どんな味かというのは、皆さんご自身で体験していただくということですね。

以上、新味覚体験のコーナーでした。

ここまでのご視聴ありがとうございます。最後になりましたが、この放送への感想・ご意見、またご質問や無茶ぶりという名の投稿は、いつものように掲示板などで募集しておりますので、どうぞよろしく願います。

パーソナリティは、プリンちゃんと、

「はあ……チルでした」

バイバイ!

……はあ、醤油味のプリン、すごかったね。

「なんとなくか、得も言われぬ醤油の風味が広がって、プリンの感触と甘味が交じってなんと……」

ああー、悪夢を思い出させないでください。

ところで、『ぴんぴん』って、結局何？

「見て分かんないの？」

……はい、では、『ぴんぴん』が何か分かった人は、下記の投稿フォームまで奮ってご応募ください。正解者の中から抽選で1名の方に、『チルの部屋で見つけた何か』をプレゼントします。

「何かって、何よ？ てか、まだ放送続いてたんだ……」

その何かは、今から探します。

……あ、この置物なんてどうですか？

「あげるのは別に構わないんだけど、それ、ほしがる人なんているの？」

少なくともワタクシはいりません。

相変わらず、チルはよく分からないものが好きですね。

「ほっとけ!!」

ねえねえ、このよく分からないカエルの置物なんてどう？ ケロ

ケロ？

「よく分かんなくなんてない！ 可愛いでしょ、この置物は!!」

さすがチルチル、美的感覚もセンスもツツコミも、常人の斜め上をいく

「そんなことないもん!!」

では、そんなチルチルには、このカエルの鳴きマネで、本日の放送を始めていただきますよう。

「ええ?!」

「さあさあ、さっきのリベンジですよ？」

「ああ、うん、えーっと……」

「そうですね、お題は『今日は雨なのに、なんだか心がムズムズしちゃうケロ?』です、どーぞ。」

「勝手にハードルを上げるな!」

「チルが早く言わないからですよ。」

「さあ、早く早く。」

「うう……………ゲ、ゲロゲロゲ〜ロ?」

……

「……………」

「……………なんでこう、チルは普通に可愛くないのかなあ。」

「わーん! 今日の放送、絶対カットしてやる〜!」

「カットはしません!」

「お蔵入りになんて、絶対にさせません!」

「では、またね〜。」

「うわ〜ん!」

ピ　　ブチン!

第十四話 ―ボクの日常5―

??ジャラジャラジャラ……

コトリコトリと音の響く教室。

窓から流れ込む、夏の暖かな風。その風によって聞こえてくる、校庭を走り回る生徒達の歓声。

エアコンの効いていない教室はむせかえるような熱気に包まれ、中に残る生徒達は一人の例外もなく汗を滴らせ、団扇や下敷きで扇ぐなど思い思いに涼を取る。

しかし、そこに座るボク達4人の額に流れる汗は、決して暑さだけによるものではなかった。

??コトリ、コトリ??カツン!

稀に高い音を響かせて、また一つため息をついた。

ボクは夏が嫌いだ。

嫌いになった、と言い換えても良い。昔は夏休みを待ち望んだり、薄着の女生徒の姿にドキリとしたこともあるが、今ではそれもただ億劫なだけ。夏休みも毎日のように補講や塾の夏季講習の予定が詰め込まれている。

「……お前、塾になんて行ってたのか?」

やだなあ、そんなの行ってるわけないでしょ。」

「……」

小首を傾げてそう話すと、机を挟んだ対面の男子生徒は閉口した。その対面も、暑い暑いと下敷きで扇ぎながら、白いカッターシャツのボタンを外して少しだけ遅しくて男らしい胸をはだけている。その無防備な姿が少し羨ましく感じるほど。

夏は嫌い。薄着になりたくてもなれない理由がある。海なんても

つてのほか、蒼いサンゴ礁も浜辺のビキニもスク水もクソくらえ！
学校の水泳の授業なんてもうトラウマ物。

「……ん、なんだ？」

そんな内心の怒りを抑えて、ただ静かに、あくまでポーカークフェイスを装って、ボクは対面に向かって微笑した。

いいえ、別になんでもないですよ？

対面の男子生徒は、思わずといった様子で再び口を閉ざした。
そう、これは戦い。

心理戦を含めた机上の戦争、騙し合いである。決して相手に弱みは見せられない。ましてや、物思いに耽って感情を昂らせるなんて自殺行為である。たとえ心身ともにボロボロになろうと、笑顔で誤魔化せなければ自分が食い物にされるだけ。そんな過酷な世界。

ふと右手側に座る男子生徒が呟いた。

「そーいや、うちのクラスはどこまで勝ち進んでるんだ？」

なんですか、気を散らせる作戦ですか？ それは口にせず、当たり障りのない会話を続ける。

さつき、サッカーは負けたって言ってましたよ？

「なんだ、あれだけ騒いでたのにもう負けたのか？」

C組もD組も現役部員で固めてますからね。でも、女子のバレーは勝ったって聞きましたよ？

「おお、がんばってるなあ。とすると、今日この後は、優勝候補のE組との対戦か」

「他に残ってるのは、どこなんだ？」

対面も会話に入ってくる。

「サッカー負けて、バスケも負けたから……後は、女子バレーと野球だな」

「ドッジボールは？」

「あれも初戦で負けてる」

うちのクラスの成績は、なかなか芳しくない様子。

オセロや百人一首はどうですか？

名ばかりの球技大会になぜか存在する球技ではない競技。オセロは、運動苦手というもやしっ子系草食メガネ男子への唯一の救済策である。

「オセロはねーよ!」

ゲラゲラと品の無い笑い方をする右側の男子。

皆さん、あまりご興味ないようで。

「というか、お前オセロだったんじゃないの?」

……いえ、急に持病が出たために欠席を??

「サボったんだな……」

……。

蒸し暑い教室の中、暑くて流れる汗でもなくてゲームの緊張感による脂汗でもなくて、心拍数を跳ね上げる冷たい汗を背中に感じた……い、いやだなあ、そんなわけあるはずがないじゃないですか。動揺を誘ってゲームを有利に進めようだなんて。なんて恐ろしい子!

「自滅してるだけだろ」

右側の男子につっこまれる。

ちなみに、持病が出たのはホントのことです。誰にも言いませんが。

会話が切れると、また微妙な緊張感が場を支配し始める。廊下を歩く生徒の笑い声がやけに響くようだった。

そして、山牌がなくなると、ボク達は順に自分の牌を倒す。

ノーテン。(ボク)

「ノーテン」(下家)

「ノーテン」(対面)

3人が告げた後、先ほどの雑談にも全く入ってこなかった最後の一人、左側の男子(上家)が牌を倒して見せた。

「……テンパイ」

はいはい、罰符1000点ね。

「誰が見え見えの役満に振るかよ」

「ぐぬぬ……」

上家の手は、みごとな国士無双テンパイ。上家のテンパイは、顔ですぐにばれるんですよ。

「くそーっ！ 『北』はどこだ、『北』は?!」

はい、こちらに。「あ、俺も俺も」と下家。

二人で絞っていたので、上家があがるわけがない。上家はがっくりと頂垂れた。

??ジャラジャラジャラ……

そう。これは生死をかけた戦い。

多くの猛者達が遙か頂へと挑み、そして敗れていった。

ボクは最近、人の顔色を窺うことにとても長けていた。それは、人類が生き残るために身につけてきた防衛本能の一種と言って良いかもしれない。人はその環境に適応するために、成長、進化することができ生物である。手を失った人はそれをカバーするように足を鍛え、視力を失った人は聴力が異常に発達することがあるようにボクの場合、視力は、人のちよつとした感情の機微さえも過敏に察知して本能としての危機を知らせてくれる。

人目を気にしてしか生きていけない害虫のようなボクの人生に涙

……あ、それロンです。

「なにーっ!？」

上家の落とした牌に、ボクはニコリと微笑んで、静かにあがりを告げた。

3人の表情を窺う。その顔を見ただけで、考えていることが手に取るように分かった。

(あぶねー、落としかけた!) 下家

(はえーよ! 俺の親が、のみ手で流された……) 上家

(……あれ? コイツって、なんか可愛くね……?) 対面
……。

いやいや、きつと気のせいだ、そうに違いない。最近、油断ならぬ事態が続いたせいで、ボクの思考能力も相当病んできているのだろう。いくらなんでもそんなこと考えてるはずがない。対面はボクの手作りの早さに驚いているだけだろう。

こう安い早手であがっていると、ボクがトップのように見えてしまうかもしれないが、実はボクは現在2位をキープしているだけだ。トップはダントツで下家。次にボクが続いて、対面が僅差で3位。ビリは上家。

親を長引かせるとロクなことがないので、早々に流して上家にはそのまま沈んでしてもらおう。そうすれば、ボクがビリになることはない。

「お前つて、けっこう黒いのな……」
ん、なんですか？

下家の呟きには気づかないフリをする。

「ちっ、しかたねー！」

舌打ちをする上家から、安い点棒を受け取った。

と、すると何を思ったか、その上家は席から立ち上がると、おもむろに上着のシャツを脱ぎ始めたではないか？！

な、何をしていらっしやるのでしょうか……？

「何つて、1枚脱いでんじゃねーか」

だから、なぜに服を……。

「えっ？　そういうルールなんじゃないのか？」

どこのエロゲーですか？！　そんなローカルルールどこにもありませんよっ！

しかし、残りの二人も服を脱ぐのが当然といった様子で、ウンウンと首を縦に振っている。

そして、ゲームは再開される。

???ジャラジャラジャラ……

ただのゲームが、本当の意味で生死をかけた戦いとなりました。他の人にとってはなんでもないことが、ボクにとってはとても恐ろしい罰ゲームとなっている。

一回り小さくなったボクのこの身体、その大きめの制服シャツを押し上げる僅かながらの膨らみ。一つトーンが高くなっているこの声は隠すことができて、制服を脱いでしまえば誤魔化しようがない。

決して負けられないこの戦い。

こっそりと気合を入れ直して、コトリ、とボクは静かに牌を置いた。

「お、それロンだ！」

……によわあ~~~~!!!??

下家の言葉に、思わず変な悲鳴をあげてしまった。

ま、まずい……。

下家はニヤニヤと笑っている。対面はご愁傷様と目を伏せている。彼らはきつと、ボクの親があっさり流されたことについて笑っているのだろう。ボクの内心の焦りは、そんな理由では、そんな生易しい動揺ではない。

くっ……。

唇を噛み締めて、ボクは下家に1000点を支払うと、3匹の野獣の視線にさらされながら諦めて衣服に手をかけた。

靴下を脱いだ。

「あ、ずっけえ！」

セーフ！

シャツ1枚が命取りなこの状況。ど、どーする？ 次は、ベルトを外そうか……？

他の連中も服を脱ぐのはついでのようなもので、別に男の裸が見たいわけでもないの、靴下だけでも軽くスルーされた。

対面がジャラジャラと牌を混ぜながら、ボクを眺めながら呟くように問いかけた。

「オマエ、その格好暑くね？」

いいえ、むしろ寒いくらいです、厚着バンザイ！

「……すごい汗かいてるように見えるんだが」

冷や汗です。

「……」

何か思つところでもあるのか、納得していないような顔で牌を積む。

そんなことを気にしていると、またやられますよ？

??ガッ!!

ボクは点数計算用の鉛筆を右手に持つて、右隣の下家の前に叩きつけるように突き刺した。

悲鳴をあげたのは左隣の上家、このゲームの持ち主。

「おわっ!? 俺のマットが！」

下家は声も出せずに青い顔をしている。

本当のズルはいけませんよ、ねえ？

イカサマ、ぶっこ抜き、この下家は本当に油断ならないから困る。渋々といった様子で、罰符を卓の上に差し出した。この供託点棒は、次にあがった人の取り分となる。

ズルは許さない。

しかし、ボクはそれほどゲームの勝ちにはこだわっていなかった。目指すは2位。1位を取ってやっかみを受けることもなく、ビリで罰を受けることもなく、それでいて油断ならないと感じさせるように牽制をして2位に収まるのが理想形。これはゲームだけでなく、学校生活から企業経営まで、全ての実生活において適応できる。下手に敵を作らないこと。敵にまわすとやっかいだとそう思わせること。ゲームとはまさに社会の縮図、リスク分析を行うための人生を写したモンテカルロシミュレーション。

2位で構わないと思う。

しかし、入った手を見逃せるほど、ボクは人間できていない。

……あ、ツモ

「なにーっ!？」

「はえ〜よ!」

パタリと牌を倒して、顔には満面の笑みを張り付ける。

メンタンピン!

と、宣言して、ボクは皆の様子を窺った。

驚愕の表情で冷や汗を流す下家。

顔面蒼白で落ち込む上家。

そして、ポツと頬を赤く染める対面。

ボクは鼻歌を歌いながらルンルン気分で点棒を回収する。役としては少ないが、何より供託点棒の存在が大きい。

これでボクはトップとなり、ビリの上家はもはや風前の灯、次がオーラスなので再起は望めないだろう。数日分の昼食費ゲットだぜ!

一人反応のおかしい奴がいるなんて、もう気にしない。

「くっそ〜、もうオーラスかよ!」

牌を積んで賽を転がして、最後の戦いに挑もうとしたところで、

突如教室のドアが開け放たれた。

ビビるボク達4人。

「アンタ達、何やってるのよ?」

担任のセンコーか、と思いきや、やってきたのはいつもの見慣れた体操服を着た女子生徒。

なんだあ〜、チルか。

「脅かすなよ!」

それぞれ悪態をつくダメンズ達。

「こんな学校で、麻??」

いいえ、これはドンジャラですよ?

呟くチルに対して、言い張ってみる。他の3人もウンウンと頷いている。1人は脱衣して上半身裸なので、チルはちょっと目のやり場に困っている様子。チル、今更そんなことしても、あざとだけ

ですよ。

「おだまり！」

ところでチル、こんなところでどうしたんですか？ 球技大会で盛り上がってる中、こんな誰も寄りつかない教室にやってくるなんて、よっぽど暇人ですね？

「アンタが言うな」

呆れ顔のチル。

いえいえ、これも立派な（裏）球技大会の種目です。この後、勝者は隣のクラスの勝者と決勝リーグを行う予定？？

「無駄に規模を広げるな！」

さすがつつこみ体質のチルですね。感心するほどのつつこみです。でもね、チル。そこは空気を読んで、つつこまずに優しくスルーしてあげるのが親心ってもので？？

「チル、うちのクラスの試合はどうなっただんだ？」

「あ、うん。バレーはなんとか勝っただけだ」

「それは聞いた。他は？」

何事もなかったように会話を始めるチルと上家の男子。

……。

そーですか、そこをスルーするんですか……。軽くスルーされて落ち込んでいると、下家にポンと肩を叩かれた。妙に生温かい目で見られたのが、何より痛くて悲しくなった。下家よ、そこは拾わずにスルーしてくれ。ますます惨めな気分になった。

チルは、クラスの勝ち残り具合を一通り説明した後、スルーしたはずのボクの方に向き直って、申し訳なさそうに話し出した。

「それでさ。実は、アンタに??」

断る！

ボクは即答した。

「……まだ、何も言っていないじゃないの」

いいや、言わなくなっちゃって分かる。こうやってチルが言い出した時は口クなことが無い。

絶対に嫌！ ヤダ！

「実はー、頼みたいことがあってえ」

嫌だって言ってるでしょーが！

「何よ。別に、アタシだって変わってなかったら頼むつもりはなかったんだけど、ちょうど変わ……………ううん、暇してるみたいだし、役に立つかなって」

あゝ、そういうことですか。そっちの用事ですか…………。

「物分かりいいじゃないの。それじゃ、行くわよ！」

と、チルはボクの腕を引っ張って、無理矢理連れていこうとする。一回り体格の小さくなっているボクは、チルの力にもなすすべなく連行されていく。

ああゝ！ ま、待つて待つて！ オーラス、トップ目が！ いや、待つて、せめてその前に靴下だけでもゝっ！？

ぺちぺちぺちぺち？？

廊下に裸足の足音を響かせて、実際には足音ではなくボクの悲鳴を響かせて、ボクはチルに引き摺られながら教室を後にした。

ゝボクがいなくなつて、その後の話ゝ

残された牌と靴下を見て、3人は誰ともなく呟いた。

「おい、どーするよコレ？」

問題となるのは、ゲームの精算。

「…………流すか？」 4位の上家

「いや待て、それは許せねえ！」 僅差で2位の下家

「だったら、誰か代打ち連れてくる？」 3位の対面

連れてくる代打ちは、別にゲームに弱い人でもいい。急に席を外した本人の責任、代打ちの財布は痛まないのだから。初心者やこのゲームのルールを全く知らない人でも良い。自動でツモ切りをしてもらうだけなのだから。振り込んでくれるなら、なおオツケー。

誰か他に来ねーかな？ 最悪、積むだけ積んで、適当にツモ切りだけするか……。

そう悩んでいると、誰かがパタパタと足音を立てて教室へとやってきた。

「あれ〜？ ねえ、チル見なかった？」

教室の中を覗き込んできたのは、体操服を着たリッコ。

「チルならさつき来て、ここにいた相方を連れてどっか行つたぞ」
下家のその言葉に、そっかあ、とリッコは頷きながら、そして何故か残されている靴下とスリッパに首を傾げた。

「リッコ、バレー勝ったんだってな。おめでと」

「あはは、ありがと。辛勝辛勝」

なかなかの激戦だったらしい。苦笑いでリッコは話した。

「午後から決勝なんだけど、ちょっとトラブっちゃってね」

「決勝か。それは見に行きたいな」

「今体育館では、男子バスケの準決勝かな？」

何気ない会話を続けながら、男達はアイコンタクトをとる。

「ところで、すぐ試合が無いのなら、リッコは今、少し時間あるか？」

下家が聞いた。

「チル探してたんだけど……まあいいや。なに？」

「うん、大丈夫、5分くらいで終わるから。とりあえずそこに座つて」

指差された空席、現在トップ目の席に座り、リッコは目を輝かせた。

「なにになに？ 代打ちするの？」

「そう。物分かりいいな。これでオーラスだから、気にせず振り込

んでくれ」

「りょーかい！」

??ジャラジャラジャラ……

ジャラジャラと混ぜ続けるリッコの手つきを見て、下家は尋ねた。

「ところで、リッコはこのゲームのルール、知ってるのか？」

「うんにゃ、知らない。教えて」

簡単に説明しようとしたところで、ふと気付いて下家は頭を上げた。同時に、他のメンツも気づいたようで、目を合わせてゴクリと息を飲んだ。

(……脱ぐのか?) 下家

(脱ぐのか?!) 上家

(……いや、でも別に大きければいいというものでは……)

対面

そんな男達の下心には気づくことなく、早くサイコロ振ってと、

リッコは期待するように牌を見つめるのであった。

第十四話 ーボクの日常5ー (後書き)

ルール知らない人おいてけぼりパート2。
……いいえ、これはドンジャラですよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125t/>

声美少女伝説

2011年9月30日03時16分発行